



[De POLA] 地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら

10

'96春夏号



特集 郷土芸能の継承
ふるさとに賑わいを!

特集 郷土芸能の継承 ふるさとに賑わいを!

笛や太鼓の弾む音、素朴で哀調をおびた唄が森や村に響く。今宵は祭り。神を迎え、故郷から出ていった人々を迎えて、山里は熱気に包まれる。数々の舞い、歌、面、酒、祈り…。先祖代々受け継がれてきた貴重な郷土芸能。その魅力と継承の工夫等を各地から――。



「花祭り」鬼の面



「五ツ鹿踊り」獅子の面



「青神楽祭り」

- 「白雲座歌舞伎」(岐阜県下呂町門和佐)
子供も若者も多数出演して地芝居を復活公演 ――― 3
- 「花祭り」(愛知県東栄町御園)
東京の子供達も交流・出演 ――― 6
- 信州・遠山郷「霜月祭り」(長野県南信濃村木沢)
里人と神々が年一度祭りに興じる ――― 12
- 神楽が人々の心をつなぐ町(広島県美土里町)
町民の誇りである神楽で地域の再生を ――― 14
- 沖縄・八重山地方に祭りの原点を見た ――― 17
素朴な中に沖縄の原語継承をこめて「マユンガナシ」18
老若男女総出で演じる浜辺の大叙情詩「節のアンガマ」20
- 子供たちの成長に夢を托して「鹿踊り」(愛媛県広見町) 24
- 酒を酌み交し神楽を楽しむ「津野山古式神楽」(高知県東津野村) 26



「でぼら」とは――

Depopulated Local Authorities(人口が少ない地域)、つまり過疎地域の意味。わが国の過疎市町村は37%にも達しています。貴重な自然環境と農産物の供給地であり、日本の伝統文化や風土を伝承してきた農山村の活性化と発展をめざすための交流誌として「でぼら」をお届けいたします。回覧し、多数の方にご高覧いただければ幸いです。

エッセイ 民俗芸能は保存するものではなく、継承し発展させるべきもの／小島美子 ――― 9

インタビュー 鈴木健二(熊本県立劇場館長) ――― 27

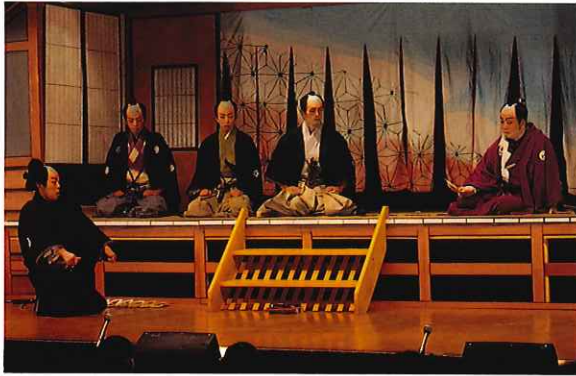
「伝統芸能」を復活して、新たな文化へ

- JRもひと役、民話のふるさと・遠野がグンと身近かになった ――― 34
- 雪国・越後の小正月 ――― 36
「鳥追いまつり」(十日町市赤倉)、「ムコ投げ」(歳之神)(松之山町)

INFORMATION [各地の郷土芸能] ――― 31
26地区で継承される「椎葉神楽」 ――― 30



▲浄瑠璃「三番叟」を演じる若い女性たち



▲「仮名手本忠臣蔵」



▲子供歌舞伎「絵本太功記」十段目

白雲座歌舞伎

岐阜県
下呂町門和佐

子供や若者も多数出演して
地芝居を復活公演

下呂温泉から益田川の支流を車で約20分、13キロほど入った門和佐地区に地芝居を上演する白雲座がある。
毎年11月2、3日、紅葉で美しく染まる白川神社の祭礼に「白雲座歌舞伎」として公演されているが、昨年は下呂町合併40周年記念特別公演が行われ、芝居小屋は一段と活気にあふれた。



白雲座／総檜造り、妻入平屋建。建物：間口16.38m×奥行20.02m×棟高9m。舞台：直径5.4mの回り舞台、花道：本花道（幅1.1m×長さ8.7m）、仮花道（幅0.5m）
客席：1部2階の棧敷席300～400人収容



▲白雲座のある白川神社境内



▲大道具、小道具等の準備に忙しい保存会の人達



▲寄付金等を書く筆字も達筆で鮮やか。

白雲座はコマ回し式舞台を備えた全国でも数少ない劇場型芝居小屋。建築年代ははっきりしていないが、舞台上に書かれた落書によれば明治23年3月27日に柿落しが行われたと記されている。

地芝居は江戸や京からやってきた人や里帰りした商人などによって各地に広がり、飛騨高山地方では娯楽の少ない山村芸能の旗手として独自の発展をとげた。明治20年代までは春秋に地芝居が行われ、白雲座は当時としては画期的な建物として建築された。

しかし明治30年以降は地芝居から買芝居へと移行、戦後は映画や歌謡ショウ等の興行に使われるようになり、各地にあった農村舞台は解体や身売りさ

歌舞伎保存会は門和佐地区の住民を中心に50人の会員で構成され、公演日には総出演。芝居小屋の準備から大道具まですべて会員たちが行なう。子供も保育園児から高校生まで参加。子供歌舞伎はなかなか人気があり、ここに出た子供たちはやがて「仮名手本忠臣蔵」「近江源氏先陣館」等を習い、次代の地芝居を担っていくことになる。

門和佐地区は150戸、人口700人足らずの集落。昔は稲作、林業、畜産を生業としていたが、近年は兼業農家や勤め人が主となった。会長の今井敏明さん（57歳）はトマト、しいたけを栽培する専業農家。練習は公演日の

れ、姿を消していった。

白雲座も何度か危機に直面しながらも地元の人々の熱意で保存され、地芝居を時々公演してきた。

地芝居の最盛期は昭和に入ってから、頃までで、戦後は25年に復活したが、3年間で終幕。しかし昭和45年に地元青年団によって演劇が行われたのを機に、再び白雲座の保存、活用が脚光を浴びるようになった。

昭和53年8月5日に白雲座が国の重要有形民俗文化財の指定を受けると共に、改修が行われ、これを記念して地芝居が復活上演された。以来毎年上演され続け、飛騨高山地方を代表する民俗芸能として親しまれてきている。



▼皆んなで回り舞台を床下から動かす



▼プロの化粧師がメイクをする



約一カ月前から夜行われる。
 今回出場の最高齢者は元会長を長く
 勤めた細江学さん（67歳）。役者とし
 ても大ベテランで、「仮名手本忠臣蔵」
 の寺岡平右衛門役で出演した。
 開幕は午後2時、客席には手弁当と

酒を楽しむ人の姿も見られる。公演は
 まず「寿二人三番叟」浄瑠璃。18歳、
 19歳の4人の若い女性が優雅に舞う。
 続いて「仮名手本忠臣蔵」七段目・一
 力茶屋の場（1時間10分）。おなじみ
 の歌舞伎だけにベテランを配しての上
 演だが、21歳の会社員や高校二年の女
 性も出演して、なかなか活気がある。
 20分の幕間を経て子供歌舞伎「絵本
 太功記」（1時間）。小学校5年、6年
 生の9人が熱演した。

午後6時からは「菅原伝授手習鑑」
 松工下屋敷の場（1時間）。今井会長
 は女房千代役で登場した。最後は40分
 の幕間のあと「近江源氏先陣館」盛綱
 陣屋の場（1時間35分）。子役に保育
 園児や家来たちに中学生も多数出演し、
 素人歌舞伎ならではの賑わい、素材さ
 を味わわせてくれる。

衣装代（一部は貸衣装、メイク、
 着付代（専門家に頼む）と出費も多い
 が、町の助成金や周辺地区住民、企業
 等の献金でなんとか採算が取れるよう
 になった。

下呂町には、他に「鳳凰座」歌舞伎
 保存会（竹原地区）や「下呂温泉台掌
 村・子供歌舞伎」などもあり、地芝居
 への関心が大変高い。時には合同公演
 や他市町の芸能上演会も開催され、温
 泉地の活力づくりにも役立っている。

（撮影／小林恵）

花祭り

愛知県
東栄町御園

東京の子供達も 交流・出演

「花祭り」前半のハイライトは子供達の舞う「花の舞」。児童数が少ない御園地区では東京の家族たちと交流、夏の合宿等を経て、昨年は東京組が5人（うち大人一人）出演した。

東

栄町は愛知県北設楽郡の南東部にあり、赤石山脈を背にした豊かな自然と古い民俗文化を残す文教の里。郷土芸能の里のシンボルとして「花祭会館」があり、毎年11月から翌年の3月上旬にかけて、町内11カ所で



▶地元期待の星・夏目君
▼東京の子供達による「花の舞」



盛大に「花祭り」が実施される。

花祭りは、鎌倉・室町時代に山伏や修験者によって天竜水系のみに伝えられた奇祭。40数種の舞いが夜を徹して行われる。おほらい・神よせの神事のあと、市の舞、花の舞、山見鬼の舞、三ツ舞、四ツ舞など数々の舞いと共に、いろいろの鬼が出てきて煮えたぎる湯のまわりを太鼓と笛に合せて乱舞する。昭和51年に国の重要無形文化財に指定された。

花祭りは11月から正月15日頃までに各集落単位に行われるが、そのトップを切って11月第二土・日曜日に開催されるのが御園地区の花祭り。本来は冬の行事だが、御園地区では正月は忙しくて人手を集めるのに苦労すると厳しい寒さの中の徹夜は大変なため、2年前から11月中旬に変更した。

御園は、東栄町の中心地から北部、豊根村方面へ車で約20分ほど行った山麓。斜面を利用して茶畑や収穫を終えた畑が広がり、道の一番高いところに、廃校になった御園小学校を改修して作られた天文台ドームがある。

人口は62戸、137人。花祭りには子供たちの舞う「花の舞」が前半の祭事のハイライトになるのだが、児童数の減少により年々それがむずかしくなってきた。

そのため他地区から数人、さらに一

昨年から、東京の子供達もやってきて、会場はかつての活気と賑わいを取り戻した。

東京からバスでやってきたのは子供9人を含む親兄弟など23人。今回はじめて踊るといふ千田一子ちゃん(11歳)は「花の舞」の「盆」を、二年目になる啓介君は「湯桶」を舞った。さらにお父さんの千田茂さん(42歳)も大人で初参加、地元のベテランに混じって「式三番」を舞った。「本当の祭りで踊れたなんて感激です」とあとで親子は語っていた。



▶お湯立ての神事

東京の子供らが参加するきっかけになったのは、数年前この地を訪れた東京の日舞の研究家広木芳枝さん夫妻が、踊り手の減少で継承が困難な状況にあることを聞き、東京で何とか御園の花祭りを支援できないかと仲間と話を持ちかけたのがはじまり。伝承志願者が約30人集まった。

花祭りに参加するまでには、東京での仲間同志の練習、御園での夏の合宿、12月には東久留米市滝山団地で開催された「花祭り」のために御園から保存会会長の清水晃さんの息子の清水靖さ



▶「式三番」を踊る千田さん(中央)

▼上手に踊れてホッとする東京から来た4人の少女



ん(大学生)ら5人が上京して公演するなど、熱心な練習と交流が積み重ねられてきた。靖さんは花祭りの継承、後継者の指導に積極的に取り組む若手ホープだ。

花祭り会場は天文台ドームのある元御園小学校。期日の変更と共に新しい装いとなって5年目を迎えた。神事は午後4時頃よりスタート。滝被い、辻固め、天の祭り、お湯立て等の神を迎える儀式を経て、6時ごろから夕食。参加者には神酒やごちそうがふるまわれる。

もともと、この祭りは「男の祭り」で、神事はもとより夕食の準備、もてなし、後片付けのすべてを男の人が受け持ち、女性は見物するだけと決め



▲いろいろな鬼たちが登場して祭りはクライマックスに

られているが、地区によっては裏方でお母さん達が手伝っている。

午後7時頃からいよいよ舞いに入る。トップを切って「ばちの舞い」を保存会会長の清水晃さん、続いて「式三番」を東京からきた千田さんも加わって4人が舞う。

「花の舞」がはじまったのは午後9時ごろ。別名「稚児の舞」といわれ、4人が陣羽織風のちはやに、はかまをはき、手甲、草鞋はき姿で、頭に花笠をかぶって舞う。役場職員の夏目さんの長男英和君（11歳）も「湯桶」を舞った。数年前御園小学校が廃校になった時の最後の生徒だったという。

その後は神事祈願祭りや舞いが幾つか行われて夜は一段と深まり、10時頃になると山見鬼が登場、さらに夜が明けはじめる午前4時頃に待望の、五穀豊穡と疾病平癒の「榊鬼」などが赤い上衣にたっつけ袴姿、腰に扇子や鈴をつけ、まさかりを持って登場、派手に舞い踊る。さらに「翁の舞い」、お多福のユーモラスな面をつけて道化的に踊る「天の岩戸開」があり、クライマックスの「湯ばやし」へ。4人がワラをもって舞い踊ったあと、ところかまわず釜の中の煮えたぎる湯をかける。この湯を浴びるとその年は健康に恵まれるそう、**「ヤケドなんかしないよ」**と住民たちは湯がとんでくると大喜びする。この湯立て、湯かけは、遠山郷・

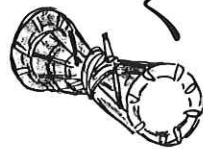
霜月祭（12頁）の場合とよく似ている。25番目の「朝鬼の舞」、次の「獅子の舞」のあと氏神を送る神事があり、祭りは終了した。予定より2時間近く遅れたため、午前8時頃になっていただろうか。眼下には晩秋の静かでおだやかな町が広がっていた。

（写真／小林恵・文／浅井登美子）



▶夜も明け、祭りが終わって会場（元小学校）を出る人々

民俗芸能は保存するものではなく 継承し、発展させるべきもの



小島美子

江戸東京博物館研究員
国立歴史民俗博物館名誉教授

“保存会”のこと

全国どこに行っても、〇〇神楽保存会とか〇〇踊り保存会などというものがある。これほもともと、神楽や盆踊りなど民俗芸能を継承する人々が少なくなってきた、やれなくなってしまうのではないかと、心配から結成されたものだろう。また文化財としての指定を受けるためには、その芸能を支える組織がしっかりしていないと困るといわれたので、指定を受ける際に保存会を組織したということも少なくないと思われる。

実際に後継者難で、民俗芸能がやれなくなってしまうところ、危うくなっているところなどはたくさんある。それで文化財保護法に無形の文化も加えられたわけだが、この法律はもともと美術品や建造物など、有形の文化財をもとにつくられた法律だから、文化財を保存し活用するということが、あまり疑われずに使われてきた。確かに、でき上った立派な絵とか茶碗とか、寺院の建物などについて考えれば、それでも十分に効果をあげて

きたといえるだろう。

しかし、ちょっと待っていただきたい。有形の文化財の場合でもたとえば一枚のすばらしい絵があるとして、それを描く心や技術などの問題はどうかなるのだろうか。伝統的な工芸にしても、そのでき上った物を大切に保存し、多くの機会に活用するということは結構だが、それを作る心や技術などの問題を考えなくていいのだろうか？それは伝えなくていいのだろうか？

まして、生きた人々が体で歌ったり踊ったり演じたりする芸能を、どうやって“保存”するのだろうかと思う。それに本当に“保存”すれば済むというのだろうか。私は長い間、それが疑問で、心配でならなかった。しかし嬉しいことに文化庁もようやくそのことが気がつかれた。一九九五年七月に文化政策推進会議が文化庁長官あてに出した答申では、“文化財の保存と活用”ではなく、“伝統文化の継承と発展”が大切であると書かれているのである。

これでやっと無形の文化財（このことはも

本当はなおしたいのだけれど）も救われると、私は大喜びしている。その意味をもう少し考えてみよう。

今まで民族芸能は どうやって生きてきたのか？

どこの町や村にも神楽とか盆踊りとか芝居とか、何らかの芸能が伝えられてきた。それは豊作や豊漁などを祈ったり、先祖の霊を慰めたり、人々の健康を祈ったりなど何かの形で素朴な信仰と結びついて祭りなどのときに行われることが多かったが、これらは村の人々が自分たちで演じるものである。それが民俗芸能だが、それはまた集落の人々が、自分もこの仲間の一員であることを強く実感する場でもあった。また仕事の場では発揮できないような、さまざまな表現能力を発揮して、自分もまわりの人々も楽しんで認めあつたりするチャンスでもあった。

実際に私などがあちらこちらで民俗芸能を見せていただいていると、舞や踊りや笛や太

千葉県鋸南町、八幡神社で行われる獅子舞。小獅子をまとった3人の若者が、笛太鼓に合わせて激しく舞う。



鼓など、それぞれにプロもかなわないと思うようなすばらしい才能をもった人々が少なくない。そうした意味で民俗芸能はまさに自分たちのためのものであった。
そして大切なことは、民俗芸能は時代とともに発展してきたということである。

かつて関東の利根川流域に広く行われていた三匹獅子舞を調べて歩いたことがある。私たちの調べたのは群馬、栃木、茨城、埼玉、千葉、東京などに広がるおそらく千を越える獅子舞のうち、数十個所の三匹獅子舞だが、それは全部それぞれ個性があった。まったく同じという所は、一つもなかった。伝承としては、この集落から教わったという伝えがあったり、そういうことを示す巻物があるようなところでも、かなり変化していた。とくに中仙道とか三国街道、日光街道など大きい街道に近い集落ほど変化に富み、多様な形をしていた。

それは何故かという点、そういう街道をその時代その時代に旅芸人たちが通るので、そのおもしろい芸を、それぞれの集落にとり入れて、三匹獅子舞を豊かにしてきたからである。

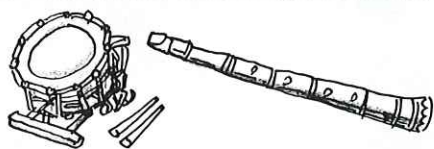
もともと三匹獅子舞は、おそらくひじょうに素朴な芸能だったろうと思われる。今のところ私は、三匹獅子舞の最初の形は動物たちと豊かに共生し、豊饒を祈る簡単な芸能だったのではないかと考えている。そこへ伎楽や散楽の影響があり、さらに中世以来の旅芸人たちの影響が何回となく上塗りされてきたのである。だから今では歌のあるもの、ないもの、弓矢や剣などを持って舞う形、女獅子隠しの劇的構成になっているもの、しかもそれが劇中劇のように複雑になっているものなど、さまざまに変化して、実に多様な形に捻っているのである。

神楽でも同じことである。たとえば山陰地

方の神楽などは、八岐の大蛇が出たり、神話に基づくドラマがオーバーに演じられている。しかしこういう形になったのは江戸時代、それも後期かせいぜい中期頃であった。もとは鈴や扇や御幣などをもってぐるぐる廻っては四方八方の神々に祈り、神に降りてきてもらって、つまり舞っている人が神がかりして託宣をするという程度のものであったと考えられる。それも神がかりのための装置が次第に大きくなって、たえば大きな藁蛇を作ったり、その中に精進潔斎をした人をいれて大きくゆさぶって神がかりさせるなどということも行われるようになってきていたのである。

こうした事例をみればわかるように、どの芸能も決して一つのきまった形に「保存」されてきたものではないことが明らかであろう。いつの時代にも、その時代なりの現代化が行なわれてきたのである。だからこそ人々はそれを生き生きと演じつづけてきたのである。もし現代化が行なわれなかったとすれば、それは人々の感覚から離れ、やがては捨てられたに違いない。日本の民俗芸能史の中には、そうした芸能も少なからずあったろうと想像される。

たとえば阿波踊りは、今は「よしこの節」のメロディで歌われている。実は一九九五年の阿波踊りでは、その「よしこの節」さえ、ほんの少ししか聞かれなかったのだが、その「よしこの節」が歌われるようになったのは明治以降のことである。古くは「ハイヤ節」で踊られていた。つまりその「ハイヤ節」は、「よしこの節」の流行とともに古くさい感じ



と受けとられて、捨てられてしまったのである。もしそれを当時の政府が「ハイヤ節」を保存すべきで、「よしこの節」などは歌ってはいけないといったとしたら、阿波踊りそのものが捨てられたらどう。

芸能は生きた人間が演じるのだから、その人間の感覚にふさわしいものでなければ、生き生きとは伝えられないのである。

ただこれまで伝えられてきた芸能は、その芸能にとつて大切なことはしっかりと継承されてきた。そしてそれを基礎にして現代化が行なわれてきたのである。山陰の神楽では、いまだに神がかりとその託宣は、もつとも大切なこととして伝えられている。まさに芸能は基本的なことをしっかりと継承し、それを現代的に発展させることによって、現在のような豊かな芸能を稔らせてきたのである。

これから私たちは どうすればいいか？

もし現代の私たちが、民俗芸能のこのような生き方を誤解し、古い形の「保存」のみにつとめようとすれば、民俗芸能は人々の感覚から遠くなるだけである。若い人々は古くさいか退屈だとかいつて継承しながらなくなるのは当然である。こうして一定の形に「保存」しようとしても、生きた人間が演じる芸能は、タイム・カプセルの中に落し込むわけにはいかないのだから、やがて滅びるだろう。つまり「保存せよ」というのは、芸能にとつてはいわば「死ね」といつているようなもの

である。

いま私たちにとつて必要なことは、大切なこと、基本的なことをしっかりと受けつぎ、その上で新しい現代の要素も加えていくということである。

たとえば大阪の河内平野に広がる盆踊りの「河内音頭」はいま若い人たちに人気がある。東京でも毎年河内音頭大会が盛大に開かれている。どうしてこんなに人気があるかという点、歌詞にその時代の世相をよみこんだりしていること、伴奏の楽器にエレキ、ベース、ギターもとり込んで躍動性を加えていること、普通の踊りの輪の外側に、若い人たちのダイナミックに変化した踊りの輪ができて一緒に踊っていることなど、新しい要素が加わっているのである。

阿波踊りもいま東京で人気があつて、おそらく三十か所ぐらいでやっているらしい。商店街が何か新しい祭りをやろうというとき、まずとり入れられるのが阿波踊りとカラオケ大会なのである。その阿波踊りも昔のままではない。徳島の年配の方たちは、身体全体の動きはできる限り少くして、かすかな揺れでリズムを表現する方向に洗練してきた。ところが若い人たちは逆に同じリズムによつてできるだけダイナミックに踊ろうとする。普通のテンポの二倍のテンポで一瞬動いてメリハリをつけたり、一連ごとにおもしろい隊形を作つて、あつといわせるような動き方をするなど、さまざまな工夫が見られる。だから今や阿波踊りには徳島だけでなく、関西方面の若い学生たちの連もたくさん加わっているの

である。

こうした工夫を加えれば、民俗芸能も当然若い人たちが魅力を感じるに違いない。沖縄本島のエイサー大会は各集落のエイサーが集つてきて競いあうのだが、このコンクールに勝つため、各集落では青年団が集つて話しあい、毎年新しい隊形や踊りの振付を作つているのである。こうしてエイサーはいまひじょうに生き生きと踊られている。

このような形で新しい形への展開を行政がそれに近い立場のものが刺激するといつのも、ある程度新しい形への要求が高まつてきた段階では、有効かもしれない。

いったい何を継承すべきで、どういう形で新しく展開すればいいか、それは個々の条件で違うので、簡単にはいえないが、多少の勇み足があつても、それを恐れる必要はないと私は思う。

ただ、まず最初に、昔からの形は、ビデオによる映像記録や文書、録音、写真など、多くの手段で記録し、みんなで研究することが必要だろう。そうすればどこをどうすればいいかということも、自然にわかつてくるに違いない。

●こじま・とみこ氏/昭和4年福島市生まれ。昭和24年日本女子大國文科卒、28年東京大学文学部国史学科卒、37年東京芸術大学音楽学部楽理科卒。東京芸大講師、国立歴史民俗博物館教授を経て、平成7年より江戸東京博物館研究員、専門は日本音楽史。昨年「椎葉の民謡」で5度目の文化庁芸術作品賞受賞。著書に「日本の音楽を考ふる」「日本音楽の古層」歌をなくした日本人」など。

里人と神々が年一度祭りに興じる

信州・遠山郷

「霜月祭り」

(長野県南信濃村木沢)



▲「猿田彦大神」が乱舞する

遠山郷は信州の最南端、赤石山脈の西麓と伊那山脈の東懐、信州から遠州に

かけての地域を総称したもので、遠山川の深い溪谷と急峻な山々の中に集落が点在している。林業で栄えた地域で、その歴史は古く、伊那の高遠から秋葉神社(天竜市)へ至る道は秋葉街道といわれ、江戸時代より講話の人々で賑わった。宿場町としての面影がいまもところどころ

に残り、大鹿歌舞伎、霜月祭りなど国の重要無形文化財の宝庫でもある。

遠山郷霜月祭りの由来はさだかではないが、国学者の本居宣長が文化8年(一八一二)に著した「玉勝間」にも登場しており、数百年の風雪を経て伝承され続けている(昭和54年国重要無形文化財指定)。

厳しい自然風土の中で暮らす人々に

とって、自然は常に畏怖と畏敬の対象である。信仰の心が生活や祭りに反映されてきたのだろう。

各地の神々を招いて 湯立てでごちそう

霜月祭りには沢山の神たちが登場する。その神たちは決して遠い架空の存在ではなく、人々の生活の傍に、身近にいる集落の氏神、耕作の神、川の神、奥山のほら穴に住み源流を守る神、峠にいて往来する人々の安全を守る神など。

その神たちと里人との年一回の出会いが霜月祭りなのである。燃えさかる火を囲み、煮えたぎる熱い湯をふるまいながら、神々と里人が夜を徹して舞い踊るといふもので、祭りは秋の収穫も終え、南アルプスの山々に雪が降り出す12月初旬から年末(一部の地区は正月)にかけて各集落ごとに行われる。祭神事は午後5時頃、氏子一同が「全国の神様、おいでになる道を清め、錦で飾っておきましたからおいで下さい」という神楽の歌ではじまり、湯を立ててごちそうする(湯立て)儀式と

神楽に続き、里の神が遠い山奥からやってきた神をもてなす儀式、神々を送り出す儀式、それでも帰らない神を手厚く送り出す神事、近くから手伝いにきてくれた神に湯を上げる祭事など20項目に及び、夕方からはじまってもたつぷり翌朝までかかる。

その準備のために、山の土を取ってきて里のワラを入れて湯釜を作ったり、一時間以上かけて山奥の神に招請の挨拶に行ったりと宵祭りも忙しい。木沢では3つの大きな釜で火を燃やし続けるため、地区の人全員が自分の山から切り出してきた薪を持ち寄る。

霜月祭りは南信濃村だけで6カ所の神社で行われるが、人手不足等により、集落によっては儀式の一部を省略するケースも多くなっている。

昔ながらの伝統を きちんと継承するために

そんな中で、取材した南信濃村木沢地区の、八幡神社で開催される霜月祭りは昔ながらの形式をきちんと継承している貴重な存在である。木沢八幡神社は遠山郷の総本山で、釜が3コあるのはこの神社だけ。さらに、他地区の霜月祭の囃子は太鼓だけだが、木沢の祭りには笛が加わる。その分、舞い全体がゆるやかで優雅なものになっている。



狐の面をつけた稲荷様など、次々と面（おもて）が登場する。すべてが数百年前に作られた貴重なもの。（写真／高橋 勉）

木沢・霜月祭りが昔ながらの伝統をきちんと継承している背景には、郷土史家、自然保護指導員で霜月祭り保存会会長の齊藤七郎氏（70歳）のような熱心なリーダーがいて、集落ぐるみで保存に力を入れていることがあげられる。

齊藤さんは、「松川青年の家」募集で見学に行った私たちの団体に、約一時間にわたって説明してくれた。

「霜月祭りは山村の生活の中で最大の行事として位置づけられ、生活の中に深くしみこんでいます。それは信仰の域を越え、生活に即応した楽しい行事なのです。ほのぼのとした土の香りや遠い昔の人々の心が脈々と伝わってくる、豊かな生命力を内に秘めています。例え村を出ても、みんなが霜月祭のことを思い出します。私も戦争で航空隊に入りましたが、留守の時、村人が霜月祭に出兵した人達の無事を祈って特別に祈願したり、奥山の神々への参拝も足繁くしたと聞きました。ゼロ戦で命を失う寸前でしたが、帰郷して霜月祭で舞うんだ、決して命を粗末にしないようにしようと思ったのです」

木沢地区の人口は176戸、426人。子供たちが学校園で赤石茶やしいたけを栽培・加工するユニークな教育で知られた木沢小学校も3年前に閉校するなど、ここでも若年人口の減少は深刻だが、冬期は凍結が心配された峠

の国道にトンネルとループ橋が完成し、交通面も大幅に整備された。

そのため周辺都市に就職した若者たちも週末には帰郷するようになり、霜月祭りにも元氣な若者たちの姿が目立った。

祭りのハイライトは深夜の午前1時頃から。その間、見学に来た人には、神社近くの公民館や児童館に仮眠場が用意された。零下二、三度だから暖房にも細心の注意を払い、シユラフを用意。村内の他地区の青年や役場職員もかけつけ売店やガイド役を手伝った。午後7時頃からはじまった数々の湯立て神事のこととは、いよいよ古式豊かな面が次々と登場し、狭い社殿の中は見学者も一段と増え身動きが出来ないほど。

夜の遠山川で身を清めてきた4人の若者が天狗の面をつけて舞う「四つ舞」、この地方を制していたが不幸な滅亡をとげた遠山家の死霊を慰める「たすきの舞」などを経て霜月祭りは最高潮に達し、大天狗（火の神）が登場して舞い終ると、「じいさ」「ばあさ」

の面、狐、大黒様、最後に天伯の面が出てきて踊り続け、これが終わると村人が「お祭りすんだ、出てこじけ」といいながら帰り支度をはじめ。当初の予定では午前6時ごろの終了と聞いていたが、実際には8時をすぎ、煙と寝不足で目を赤くした人達が陽光

の中をまぶしそくに各地へ散っていった。その後氏子たちは、裏方で働いたお母さん達のもてなしで酒を酌み交わし、二日間の労をねぎらった。

「集落みんなの協力があれば、祭りも村おこしも可能ですが、将来のことも考えて、昨年11月に霜月祭保存会を設置しました。木沢地区以外の人でも関心と理解のある人には伝授していきたくて思っていますので、ぜひ出かけてきてください」と齊藤さんは言う。昨年募集したところ40人が受講した。専門家を呼び、5日間かけて歴史から太鼓、笛、謡を一通り教えた。

南信濃村の中でも天狗等の舞いを地区以外の人にサービスとして提供している集落もあり、一週間特訓を受けて天狗の面をつけさせてもらったという元教師は「あんなに祭りが楽しく気分の良かったことはなかった。以来霜月祭を欠かさず見物に来ています」と語っていた。

なお、長野県立「松川青年の家」では郷土の芸能文化にふれてもらおうと「郷土の民俗芸能を訪ねる」催しを年数回実施。今回の霜月祭りには県外者を含めて93人の応募があった。個人では祭りの詳しい内容がわかりにくいし、夜を徹しての祭りには参加しにくい。女性たちにも好評である

（浅井登美子）

神楽が人々の心をつなぐ町

町民の誇りである神楽で地域の再生を

—— 広島県美土里町



国地方の典型的な中山間地であるこの町は、熱心に行われる神楽を地域文化のシンボルとし、これを後世に引継ぐことで町の個性を育み地域の誇りを醸成しようとして、神楽文化の育成と交流に主眼をおいた「神楽の丘公園」整備に着手した。

神楽の熱気を 地域づくりの エネルギーに

「地域づくりの柱として何があるのか見渡してみたら、これが神楽だったんですね」と語るのは役場に設けられた地域活性化対策室係長の溝本郁天さんである。美土里町では過去10年余、さまざまな地域活性化施策を手がけてきたが、思うほどの成果はあがらず、人口はずっと減少が続いている。

美土里町は広島県の北端に位置し、ひとつ山を越せば島根県という中国山地まっただなかの3800人あまりの

小さな町である。コシヒカリやもち米栽培を主とする農業が中心で、他にはこれといった産業は見当たらない。町の働き手の多くは職を求めて三次市近辺や千代田町あたりに通勤する。より便利で快適な暮らしをと広島市へ家族で移っていった人も少なくない。町に隣接して中国自動車道高田インターチェンジがあるが、その機能を地域の活性化に生かされていないのが実情のようだ。

町では、長期ビジョンとして「文化の薫り高い町づくり」を掲げ、その第一歩として「神楽の丘公園」の整備を行うこととし、平成2年にマスタープランを策定、平成10年の完成をめざして工事を進めている。では、なぜ神楽という素材を町は選んだのか。溝本さんは言う。

「何もないこの町で、神楽が唯一の財産なんです。美土里ほど熱心に神楽が舞われるところは近辺でもありません。しかも、江戸時代からずっと続いてきている。他に楽しみもない山間地で、神楽は秋の収穫に感謝し来年の五穀豊穡を願うものであると同時に、人々にとっては年に一度の華やかな舞台。一



建設が予定されている「神楽の丘公園」の中枢施設（模型）

年の苦労から解放され、ともに生きる喜びをわかちあう祭りなんです」神職ではなく氏子自身が舞う美土里町の神楽。現在でも町内のほとんどの氏神社ごとに神楽団が編成され、13の神楽団がある。神楽という芸能を軸にした共同社会、人間らしい助け合いのある田舎社会を形づくっている。

「太鼓の音や勇壮な舞い振り、寒い中で一緒に神楽に興じた記憶などが、美土里の人々の心をつないでいるんです

神話の故郷である出雲・石見文化圏と、中世以降の表街道である芸州文化圏との接点に位置し、両文化の交流する土地として栄え、今なお豊かな民俗文化を数多く残す広島県美土里町。中

ね。誰もが神楽には熱い思い入れがあつて、様々な思い出を持っている。神楽こそが美土里の人々を元気にし、ひとつにしてくれるものなのです」

役場のロビーには「神楽の丘公園」の模型が展示されている。民芸工房や展望浴場、レストランなどを備えた憩いの場「民楽の庄」、神楽資料館を中心とする学びの館「笹の尾根道」、松明のかがり火が神秘的な神楽殿のある「舞の庭」の各ゾーンが立体的に構成された魅力的な施設である。神楽を中心とした文化の育成と、日々の生活に活力と潤いをもたらす交流の場づくりにかける町の意気込みが伝わってくるよさだ。

■時代の変化に流されず

神楽を中心としたコミュニティの様子がきつとわかりますよ、と案内されて「青神楽」を見に行った。秋だけなわの11月11日。あたりの山々は真っ赤に染まっている。ここは町の北部に位置する青地区。48世帯、150人ほどが暮らす小さな集落である。

神楽の公演会場となるのは地区の集会所。午後2時、なごやかに準備が始まった。団員が10人あまり、若い人が多い。舞台に幕を張り、天蓋をつるし、太鼓をしつらえ、きらびやかな衣装や面を並べたりと、世間話をしながら楽しそうに作業は進む。この青神楽団を



青地区の「青神楽祭り」。写真・上は能舞の「鈴鹿山」。中央で太鼓を打つのが青野団長。続いて鬼や天狗などが次々に登場する（写真・下）





▶紅葉が美しい青地区の大年神社。



◀舞台作りから衣装、メイクもすべて自分たちで。一人何役もこなすため舞台裏は大忙し。

率いるのが青野芳輝さん・72歳。嘱託で郵便配達の仕事をしている。聞けば18歳からずっと神楽に関わってきたのだという。

「神楽団にどうか入れてくださいと古老に頼んでやっと入れても最初は裏方だ。当時はこの地区も人が多かつたし、神楽団も大人数だった。神楽団に入ることは村の大人として仲間に入れてもらえないことだった。夢中になって所作を覚えて、初めて舞台に立った嬉しさは今でも忘れられない」と青野さん。

やがて青地区でも過疎が進み、働けず収入を得ることが難しくなり、残った者は勤めに出るようになった。神楽の存続も大変な時期が訪れる。しかし地区の絆を絶やしてはいけないと、青野さんは神楽の保存を呼びかけてきた。「神楽は毎年変わらない。先輩から受け継いだ通りのことをきちんと舞う。でも、毎年地区の人みんなが楽しみにして見に来てくれるから続けてこれた。この地区を出ていった人たちも神楽の夜は帰ってくるし、今夜もきつと賑やかなになるじゃろ」

様々な思いが交錯する 神楽の夜

暗くなつて集会所の庭にかがり火がたかれる。気温は2度。8時に氏神である大年神社で氏子総代が揃い古式ゆ

かしく神事が行われ、神楽の始まりを知らせるかにようにしめ太鼓の音が谷間に響く。

9時を過ぎる頃から毛布や布団、酒肴を手地区の人たちが集まり始める。神楽団の方も準備は万端。白装束に青袴、黒烏帽子を身に付けた青野団長が舞台上の清めの酒をまきに出ると、会場の子供が「あ、郵便屋さんだ」と指を差し、周囲にあたたかな笑いが起こる。やがてドンドン・ドンドン・ドンドンと単調な響きにのせて異無形民俗文化財である「神迎え」が始まる。鈴と弊を手にした四人の舞い手がそれぞれ四方に揮する形式の厳肅な儀式舞の後、一転して派手な能舞の「悪狐伝」「鈴鹿山」などの演目が続く、舞台狭しと立回る熱演が見るものを神楽の世界に引き込んで行く。

狐退治の口上の面白さに見物人はどつとわき、くるくると独楽のように舞う若い役者に喝采が飛ぶ。煙幕がたかれ、火花が散り、鬼が客席の中に乱入し見えを切る。龍や亀をほどこした見事な衣装が照明に映える。女形の口上が見物のお年寄りとの掛け合いになったり、他から合の手が入ったり、見せ場になると声が飛んだり、舞台と観客が一緒になつて神楽の世界をつくっているのだ。いつのまにか客席の後ろでは酒宴が始まった。

11時近くになつても、まだまだ人が

やってくる。もう小さな集会所の中は150人あまりの人で溢れんばかりである。見る方も長丁場、横になったり一升瓶を囲んで語らったり。演ずるほうもマイペースで悠長に流して行くがさすがに見せ所はきちつとして、あうんの呼吸、手慣れた感がある。青野さんの太鼓を打つ調子も上々のようだ。

地区を20歳の時に出て、35年間広島市で暮らしているという人に話を聞いた。

「ここに母が住んでいるから、ずっと神楽の時は里帰りをしているんだけど、子供の頃に見た神楽が忘れられなくて。毎年、神楽の時期が近づくともうたまらないね。昔の方がもっと面白かったような気がするけれど、毎年変わらぬ神楽が続いていることが、美土里と私を結んでいるようなものです」と目を細める。

土地の人は神楽の話になると必ず昔の話になる。それも4年や5年前ではなく、一気に30年前や50年前、時には戦前の話になる。そんな昔の事をまるで昨日のことのように語る人たち。ここだけは時の流れがゆるやかなのだ。

美土里の人たちの心をつなぐ神楽は、豊かな感性に満ちた良い田舎を再生していく大きな素材であることを確認した夜だった。

(写真・文/矢島浩三)

沖縄・八重山地方に祭りの原点を見た

カメラ／小林 恵



沖縄県八重山地方では、旧暦の8月
から9月の己亥または戊戌の日（10、
11月頃）、各地で「節祭り」が盛大に
行われる。秋の収穫もほぼ終る節目に
当たり、五穀豊穣を与えてくれた神々
や自然の恵みに感謝しながら、新しい
年を皆で祝福する祭りである。

地域総ぐるみで三日間にわたって行
われる竹富町西表租納の「節のアンガ
マ」、石垣市川平地区に古くから伝わ
る節祭り「マユンガナシ」を取材した。



素朴な中に、沖縄の原語継承と自然への感謝をこめて——石垣島川平「マユンガナシ」

長の案内で各地の文化財を学習する活動が行われており、この日の見学会で5回目となる。

早野家へ現われるマユンガナシを、家の中からご亭主の横で見学させてもらえるという特別のほからいで、「絶対声をあげたり、さわいではないけないよ」と大田先生は何度も子供達に念を押す。

村民もマユンガナシの神様におられたり直接目を合せたりすることはないらしく、見学者も速くからマナーを守りながら静かに観察し、撮影することは原則として禁じられている。

「ウフィン」というような声を上げ、正座して家の中からそれを迎える亭主は、それに応えるように「オー」とか「ウー」というような声をあげる。

そのあと約1時間にわたってマユンガナシは来る年の豊作を祈願するカンフチイ（神の言葉）を庭先でゆっくり唱える。

「八重山の民話」によれば、昔、節祭を明日に控えてどの家も明々と灯を燈しごちそう作りにはげんでいた。ただ一軒ハイヌヤーの老夫婦の家だけは貧しくてごちそうも作れない。そこへ一人のみすぼらしい旅人がやってきて「泊まる所がなく困っている。一夜の宿をお願いしたい」と頼んだ。「あばら屋で、何のもてなしもできないが」と家へ入れ、粟のかゆを炊いてごちそうした。すると男は、

「実は私は農作物の作り方を人間に授けるために天からよこされた者。おまえたちに豊作を授けよう。これからも神を敬い人を愛するのだぞ」といって、大切な神口を教えてくれた。



▶マユンガナシの到着を待つ文化財愛護少年会の人たち

以来、貧しい夫婦の作物はいつも村一番の豊作となり良いことばかりが続いた。老人を門前払いした村人も後悔して、神の教えを守り、よく働くようになったという。神様が現われた日、亥の日になると川平ではいまでもマユンガナシの行事が行われている。神に扮する人は成年生まれの人から選ばれる。名誉ある役だが、



石垣市教育委員会
手づくり見学会パンフレット

節祭の日になると石垣島川平には「マユンガナシ」という神様が現われ、村内の家をまわって豊作と幸せをもたらすという。その日に当たる11月3日の夕方、石垣市文化センターから出発するバスに同乗させてもらって川平地区へ出かけた。バスには石垣市文化財愛護少年会の小学生達が15人ほど乗っている。大田静男文化部

沖縄の農村風景が今も色濃く残っている川平地区。午後7時頃、その中心部にある道の彼方から二人一組となったマユンガナシがどこからともなく現われて、早野家の庭先に立った。

クバの笠をかぶり、蓑を着て、その下にバシヨウの葉をつけている。顔は手ぬぐいで覆い、足は裸足。六尺棒をたずさえている。神は、掃き清められた庭に立つと

以来、貧しい夫婦の作物はいつも村一番の豊作となり良いことばかりが続いた。老人を門前払いした村人も後悔して、神の教えを守り、よく働くようになったという。神様が現われた日、亥の日になると川平ではいまでもマユンガナシの行事が行われている。神に扮する人は成年生まれの人から選ばれる。名誉ある役だが、



古い狂言を多量に保有・継承 竹富島 たねとる [種子取祭]

沖繩諸島では祭りの折々に、その村固有の踊り、狂言、組踊りなどを演じるが、最も多数の狂言を保有しているのが竹富島である。竹富島狂言は、新作の狂言に対して、伝統的な「例」と呼ばれる

この竹富島で秋の収穫を祝って行われる「種子取祭」は島一番のビッグイベント。島民は練習や準備に一カ月間以上を費やして、2日間の公演に燃焼しつくす。この種子取祭は「竹富島狂言祭」ともいわれ、民俗芸能として注目され、当日は全国から郷土史家らが訪れる。(昨年は11月26、27日開催)

珊瑚礁の美しい海、白い砂浜、沖繩の風土をいまに伝える古い民家。竹富島は石垣島から船で10分だが、特有の明るくのどかな島のたたずまいと美しい環境で、観光客に人気がある。

「御主前」「天人」等は沖繩本島の長者大主に捧げるもの、それ以外は、種子を無事発芽させてもらうことを神に述べる内容となっている。最後には組踊りが行なわれ、祭りはクライマックスに達し、二日間の熱演に幕を閉じる。

写真提供/竹富町



選ばれた人はカンフチイを覚えるのに、それこそ一年間大変な努力をして暗記し、神の化身としての役割を担う。

カンフチイ(神の言葉)は、「うーとおーど、きゆぬびい、わかるびいーに、うーとしい、みーとしい、んかい、くだり…」(あ、尊、今日よき日に、大年新しい年を迎えて、下って来ましたまゆがな、真世加那志だと、こう唱えます、尊)にはじまり、たーたばる(田

園田原)、むん(麦)、あわ(粟)、きいん(黍)、はあこん(甘藷)等々、農作物の作り方から、子孫や牛、馬等に関する教えまで膨大な量に及び、これを一つでも間違えるとはじめからやり直すかも一人のマユンガナシが助ける。

一節ごとに、前述した奇声のかけ合いがあり、最後に、亭主より感謝の意が述べられ、マユンガナシは足を洗って家の中へ招かれ、酒、煙草、ごちそうなどがふるま

われ、土産の品(魚など)をもらって帰っていく。

雨の日も嵐の日も決して中断したり略したりすることなく続けられてきたこの行事は、自然と人とのいとなみの原点、感謝の心を、沖繩の言語で伝承していくもので、現在、これらの言葉を聞いて理解できる人はほとんどいなくなっただけに、貴重な存在である。

見学した子供達も「全然わからない」と言いながらも、一時間正

座して静かに見入り、帰りのバスの中では盛んに「ウフーン」と真似ていた。

それにしても、各地の祭りで登場する威権があり華麗な姿の神々に比べて、マユンガナシは何と見すばらしいことか。しかし素朴で物悲しさを感じさせるこの神に、私たちは深く魅せられた。神という存在と共生したという不思議な感動を味わいながら、静かな夜の山里をあとにした。(浅井登美子)

老若男女総出で演じる浜辺の大叙情詩

西表島・祖納地区「節のアンガマ」



▲ミルク様になった古見代志人さん。



▲公民館で最後の棒芸の練習をする少年達。



▲前泊浜へ向う行列

西表島では現在^{ほたて}千立、^{そない}祖納の2地区で行われているが、祖納は島の中心地で最も人口が多い（182人）ため、祭りの規模も大きく、昔からの伝統をそのまま継承している。

もともと老人から子供までが参加する祭りだが、人口は20数年前に比べて100人以上減つたため、2日目の前泊^{まいどはま}浜の祭りには、商店も宿泊施設も店しまいし、住民

石 垣港から西表島船浦港へ向う船は、「節のアンガマ」を演ずるために帰郷する人、見学する人に乗せて、荒海を突っ走った。毎年欠かさずやってくるというファンも多く、船室では早くも祭りのお話で湧いている。

「節のアンガマ」は、^{しちい}節祭（旧暦8、9月の己亥の目）に、3日間にわたって行われる島最大の行事で、年の節目に海の彼方から五穀豊穡のウシマユー、ミルクユーの神々を迎え、豊年と村人の健康を願う祭り。

常にドラムを打って
進行役も勤める崎枝登さん





▲女性たちによるアンガマの行列

この日には毎年東京の明治学院大学の生徒も多数やってきて、ボランティアで会場整備を手伝う。もう半年以上、民宿を手伝いながら西表島暮らしを楽しんでいる学

演 じる村民の中には、祖納診療所に昨年赴任してきた若い医師や学校の女子職員など多い。「練習も楽しかったし、村民ともすっかり仲良くなり、ここが故郷のようです。どこへ行っても生涯忘れないでしょうね」と那覇市から単身赴任してきた栄養士さん。

すべてが浜に移動、村内の機能はストップすることになる。



▲砂浜には3本の幟が立てられた

生もいた。

前夜祭は深夜まで
予行演習

我々が到着した11月4日は「節の日」の一日目で、この日は大晦日に当たる。人々は家を清め身を清め、翌日新しいユウ（幸せ）を迎える準備をする。夜は、祭り最後の予行演習が公民館で行われる。民宿で早々と夕食を済ませると、すぐ近くにある公民館へ出かけてみた。見学者も多い。

壇上には幟旗等が飾られ、神酒が供えられ、ミリク、アンガマの着用する着物等が供されている。予行演習は、服装こそ普段着のままだが、演目に従って本番さながらに行われる。主として雨のため室内で行われたが、動きの激しい若者たちの狂言、棒芸などは野外ですぶ濡れになって演じられた。

まず、子供たちによる棒芸。二人が向き合って棒を使って舞い闘うもので、小学一年生から高校生、青年部までが演じる。

見学する一人の男性が「私の小さい頃は子供も大勢いたので、棒芸に選ばれることが大変誇らしかったですよ」と語る。この人、祭事が土日曜日になる時は欠かさず家族を



▲紅白に分かれて船漕ぎ競争。左はコーウイ舟。



連れて山口市からやってくる。

棒芸が終了すると、女性たちによるアングマ踊り。先頭で音頭を取りながら歌う人、太鼓を打つ人、笛奏者などはいずれもベテランの中高年婦人。70歳前後だが、声量があり、高い声も充分出て素晴らしい。

その後も練習は延々と続き、女性達が帰宅したのは11時、男性は12時を過ぎ、最後に明日浜辺で行われる祭りの時間が決められた。船を出す関係で潮の満引きを計算し、那良伊区長より祭りは11時に開始と告げられた。

「今日は誇りしや」の舞いが日暮れまで

二日目、いよいよ本祭の日。11時にミリク様（弥勒）に扮する男性が壇上に現われ、神になるための所作のあと、面をつけた。とたんに周辺は輝やき、ミリク様というありがたい神様が存在する雰囲気

に包まれるから不思議だ。美しく化粧して神事の衣裳をまとった女性たちや白衣をキリリと着た少年たち、青年たちが次々と公民館に集ってきた。純白に真紅や海のブルー、沖繩伝統の紬などを取り入れた衣裳も素晴らしいが、村民たちの何と生き生きとして色香漂うばかりの美しさ。昨日まで

▼ミリクの伴をする若い女性たち



我々の泊った民宿の若夫婦も当然各々に重要な役割を演ずるわけだが、客の接待もあり、大変だ。

見た人々とはどこか違い、近よりたい存在。こうして人々は神となり巫女となって祭りを演ずるものへと変身していくのだろう。

小雨の中を華やかな行列が浜辺へと向った。白い砂浜が続き、前方に小島のある美しく穏やかな海岸、前泊浜。祭りは祭場に入場するミリク様、それを迎える行列歌ではじまる。「大黒ぬミリク我島にいもり今年から我島 世界報でむぬ」と歌い、少女らに付添われたミリクは中央に設けられた壇上に坐する。

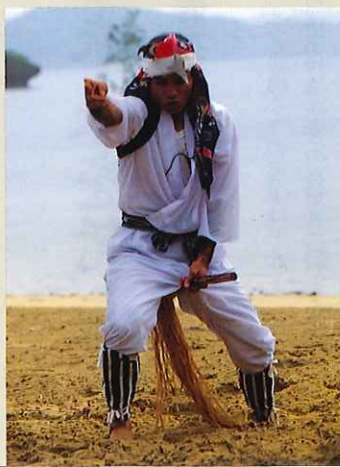


▲浜で男たちの無事と勇気を讃える女性たち。両者の歌、踊りは最高潮に達する。

▼ドラが祭りを盛り上げる



▼男子の狂言（口上と舞い）



次いで女性達によるアンガマ行列。黒い布を覆ったフダチミという女性を先頭に、太鼓と歌、ドラ打ち、笛奏者が続く。
「今日ぬ誇らしや なうにちやなたてる ちぶで居る花ぬ ちゆきあたくと ヨーホンナ」という歌に合せた行列は、海辺の風景と溶け合い、映画を見ているよう。
子供たちが広い砂浜で思い切り演ずる棒芸、男性たちが荒々しく演ずる狂言（キツポー、ルツポー）のあと、いよいよ船漕ぎ競争。白組、赤組各9人ずつに、舟頭、仮舟頭各4人、太鼓打ち2人が舟に乗り込み、「舟ヌジラー」という祈願歌を唱えながら沖の岩へ舟漕ぎしてきたあと競漕に変わる。小島を一周して浜へ戻ると一人が小旗を取って浜へ戻り、それを3回くり返す。浜では女たちが男たちの勇気を讃え、海上での安全を祈

願して歌い舞い続ける。無事舟を降りた男たちもその舞いに入って激しく歌い踊り、クライマックスとなる。
祭りは休憩、来賓者の挨拶等を入れて夕方5時近くまで続いた。ミルク様が公民館に戻り、いくつかの儀式を経て普通の人に戻る頃には、海辺も暗闇がせまっていた。
これで我々観光客で賑わった「アンガマ祭り」は終了したが、三日目も「ツツミ」という井戸祭（村内の井戸を清掃する儀式）が行われる他、午後4時には再びミルクを除く村民が昨日の服装で集合して舞いをしたあと村内の各家をまわる。それが終って公民館へ集合、代表の挨拶があり、節行事のすべてを終了するという。
11月というのに里では美しい花々が咲き、山ではセミが鳴く夢の島であった。（文／浅井登美子）



鹿踊りに子供達の未来を托して

五ツ鹿踊り (愛媛県 広見町清水下組)

東北の「鹿踊り」がルーツ

広見町大字清水(せいすい)下組地区は、JR宇和島駅から車で25分。高知県との県境近くの農林業を中心とした典型的な農村。ここには東北の「鹿踊り」の流れをくむ素朴で哀愁を帯びた子供達による「清水下組 五ツ鹿踊り」が、保存会を中心とした地域の人々によって大切に受け継がれている。

「五ツ鹿踊り」の起源は1615年、仙台藩主伊達正宗の長男秀宗が宇和島十万石に封じられ、宇和島城主になったことにある。現在、宇和島市を中心に各地で「五ツ鹿踊り」保存会があり秋祭を中心に踊り継がれている。これらの「鹿踊り」は、東北地方の「鹿踊り」が原形で、衣裳や歌詞はよく似ているが、頭にかぶる「しし」の形や踊りの形態、リズムや旋律などがかなり

異なっているのは、宇和島地方の風土によって変化し、今日の形になったといえよう。

ところで、「清水下組 五ツ鹿踊り」は、笛の伴奏で、歌い手は長唄に続いて歌詞を唱い、踊り手は小太鼓を抱えて打ちながら踊る。この形態は東北の「鹿踊り」に多くあり、長唄や歌詞は宮城県内の「鹿踊り」と同系統のもので専門家も注目している。

380年の伝統を持つ「五ツ鹿踊り」は、氏神天満神社の秋の祭礼に牛鬼と共に練り物として演じられ、昭和40年に愛媛県の無形文化財に指定されている。

例年、天満神社の秋の祭礼は11月15日だったが、もっと参加しやすいうように、昨年(11月3日)の「文化の日」に開催するようになった。この日程の変更には、清水下組の保存会(谷口隆義会長)と神社や周辺地区との話し合いなどに数年がかりの調整を要した。その努力が実り、訪れたときは土・日曜日が加わって三連休となったこともあって、例年になく大盛況となった。

冬を告げに里へ来た 鹿たちがモチーフ

踊りを構成するのは雄鹿4人、雌鹿1人、笛2人、歌1人、衣装2人、警護2人の計12人。鹿役の5人は鹿の毛皮に似た着物に鹿の面をかぶる。面か

ら垂れ下がった前衣で踊子の顔をおおひ、首から下げた小太鼓を打つ。雌鹿の頭には竹の笹とすすきをつける。鹿の頭は二組あり、古い方は江戸末期に作られたもの。現在使われているのは、約20年前に作られたもので軽量化がなされている。古い面を使ったことのある保存会の人は、とにかく子供には重かったという記憶があるそうだ。雌鹿は角がない分軽いので、年少者が雌鹿をやる人が多い。昨年は保存会会長の孫・谷口裕樹君(小学3年)が雌鹿を演じた。全員わらじ履き。ムシロ数を敷きその上で踊る。笛・唄の大人達は紋付き羽織に袴の盛装。

「清水下組 五ツ鹿踊り」は全体で15分前後の踊りで、全八段から成り一つの物語を表現する。

第一段(勢揃) 雄鹿四頭、雌鹿一頭が勢ぞろいで登場する。

第二段(道行) 五頭の鹿が連れだつて山を降りる。

第三段(和楽) 五頭の鹿が仲良く庭で踊り遊ぶ。

第四段(鬭争) 先頭の鹿が後尾の鹿と雌鹿の奪い合いをして、先頭の鹿が勝つ。しかし、この争いに驚いて雌鹿は、すすきの中に身を隠してし

まう。

第五段(捜索) 雄鹿達が一生懸命に雌鹿を捜し、ようやく見つけて五頭で喜び合う。

第六段(鬭争) 二頭の雄鹿が争い、今度は後尾の鹿が勝つ。

第七段(和楽) その二頭が仲直りをして、仲良く遊ぶ。

第八段(道行) 五頭が連れだつて山に帰って行く。

二年後には女子の 踊り手も登場!?

鹿役5人は、小学校の高学年の男の子が踊ることになっている。かつては子供の数が多かったたので、「五ツ鹿踊り」の鹿になれるのは長男に限られていた。それでも、希望者が多く、なかなかなれなかつたらしい。現在は、子供の数が減少し、小学校3年生から中学校2年生まででようやく「五ツ鹿」を作っているのが実情。二年後には、地域の適齢期の男の子で「五ツ鹿」ができなくなり、「清水下組 五ツ鹿踊り」史上初の女の子の踊り手が誕生する予定だそうだ。

踊りの練習は、祭りの一カ月前から週2〜3回、夜に清水下組の集会場で一、二時間行われる。参加するのは踊り子の少年5人、予備軍として見習い中の少女3人、笛・歌など保存会の大

人5、6人。それぞれが予定をやり繰りして集まる。特に中学生はクラブ活動が忙いので練習が大変だが、年少者を引っ張りながら頑張っている。

練習の時は鹿の面をかぶらず、小太鼓だけを付けて踊る。それを見る限り、かなり激しい動きの踊りのように思えるのだが、本番でいざ鹿の面をかぶって踊る姿には哀愁が現れる。また、面が場面場面で猛々しくなったり、脅えたり、優しくなったりと様々な表情を見せ、見る者を引き込んでしまうのである。

踊りは地区内4カ所をまわったあと、獅子舞い等の「お練り」の行列が加わり練習をする子供達





踊りを終えて帰っていく少年たち。

って天満神社へ奉納される。その時のご祝儀はあとで踊った子供達の小遣いとして手渡される。「五ツ鹿踊りは、鹿の姿にたくましくやさしい心を持った子供に育ってほしいという人々の願いを托したものだと思います。だから神楽等の神事に比べると暖かさ、素材さがあり、みんなに愛され親しまれています。鹿踊りをするので子供も地域の一員としての自覚を自然に身につけていくようです」と谷口さんは語っていた。

酒を酌み交し神楽を楽しむ

高知県
東津野村高野三嶋神社



五穀豊穡、無病息災を祈願して、秋祭（11月3日）に奉納する。舞は11の素面の舞と、7つの面をつけての舞があり、六調子という足運び、膝折り、鳥飛びなど、数種の所作がある。舞納めるには約8時間を要す。舞人は神職と舞太夫で独特の囃子、大太鼓のリズムにはロックに通じるものがある。

津野山一帯の神社には神前に4メートル四方の「舞殿」が設けられていて、ここで神楽が奉納される。また三嶋神社には「舞殿」の隣棟に「高野の舞台」と呼ばれる農村歌舞伎の舞台がある。

1873年に建てられた、日本で唯一の上廻し鍋蓋式廻り舞台である。ここでは、国の無形民俗文化財の「農村歌舞伎」が、4年に一回開催されている。

秋の取り入れも終わり、紅葉した山や神域の杉並木にこだまする神楽太鼓。「舞殿」の周囲には酒がまわってご機嫌になった人々同士の話がはずむが、神楽太鼓が鳴り始めると、皆の視線が「舞殿」に注がれる。舞太夫の舞が極

に達すると、「よう舞う、よう舞う」の声援が飛ぶ。酒を飲みながら、しゃべりながら、神と人が一体となって

楽しむ。

愛媛の「五ツ鹿踊り」が静とすれば、「津野山古式神楽」は明らかに動だ。

「神楽」を授業に取り入れて

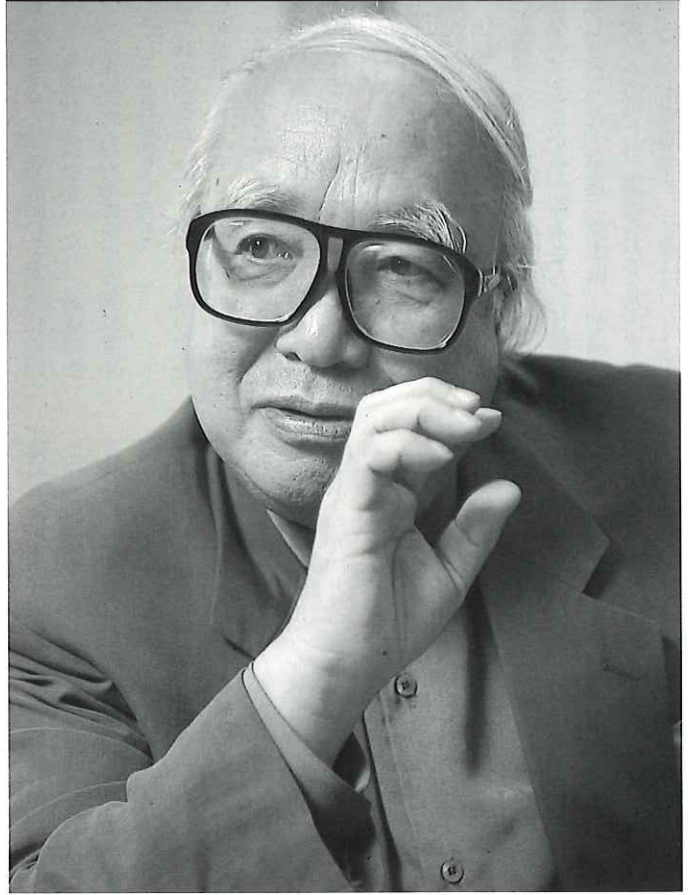
保存会では小中学生に休みの土曜に、「津野山古式神楽」の講習会を開き、太鼓や鐘のたたき方を教えている。しかし、子供達はクラブ活動などに忙しく、集まりはあまり良くない。また、隣町・梶原の梶原高校では授業の中に「神楽」を取り入れている。地域の人々は皆何らかのかたちで「神楽」を体験することになり、こうした経験が成人した後、本格的に「神楽」に入る土台を成しているのだろう。

東津野村は、四国カルスト県立自然公園の中に位置する四万十川源流の山不入山のある村として知られている。産業は農業が中心で、お茶、椎茸、ワサビなどが生産されている。観光面では四国カルスト天狗高原があり、冬はスキー、夏は避暑で賑わう。宿泊、休憩の施設の充実を図っており、今後は、産業の振興、観光の振興を目的とした国道の整備が重要課題で、国道197号線（布施ヶ坂バイパス）、439号線の整備を促進し、さらに活性化事業を推進していくと、町の関係者は語っていた。（写真・文/武田 栄一）

●インタビュー

鈴木健二氏

(熊本県立劇場館長)
元NHKアナウンサー



物事は両目で
じっくり見るものだ

NHKを退職し、人生のしめくくりとして熊本の地を選んだ鈴木健二さん。「行動する美しい劇場」、これが熊本県立劇場のコンセプトだ。

「三十六年間テレビメディアのなかにおいて、国内はもちろんシベリアから南米の奥地までおおよそのところは取材したつもりでいます。ところが日本の山村が深刻な過疎に直面していることを知らなかった。まず人がいな

い。今はなんとかお年寄りが頑張っています。が、若い人の姿がない。そうなるとその地方が何百年と受け継いできた伝統芸能も消滅してしまふし、先祖代々手塩にかけてきた農地や山村も荒廃し、やがて山間地の集落が消滅してしまふ。これは大変なことです。

私はマスコミの一員として過疎問題に正面から取り組んでこなかったことを恥ずかしく思いました。テレビのようにその日の、その瞬間の映像を追っかける価値観だけではだめなんだということに気がついたんです。

両目をしっかり開いて、長時間に渡って眺



▶波野村「中江岩戸神楽」。200余年の伝統を持つ。鈴木館長のもとで33座を完全復元、神楽苑も開設。



▶清和村「文楽館」(平成4年開設)では第2、第4日曜日に文楽人形芝居を定期公演している。

自然の豊かさ、人々の心優しさの結晶——
「伝統芸能」を復活して新たな文化へ。

めるべきものがたくさんあるのに」

そんな鈴木さんがまず開始したことは、祭りの文献を取り寄せることでもイベントを起こすことでもなく、実際に村を訪ね歩きリーダー格の人々から話を聞くことだった。その土地でどんな人たちがどんな暮らしを送っているか、そして伝統芸能が今どのような形で保存されているか。就任一ヵ月後の8月初旬から、鈴木さんの熊本県下98市町村巡りの旅が始まった。5ヵ月半を費やしたその行程は、鈴木さんにとって「感動と怒りの連続だった」という。自然の豊かさ、人々の心優しさをその結晶として歴史的にも民俗学的にも興味深い芸能の数々が存在していた。その感動。だが、それらを危うくする高齢化と過疎化の問題はどこでも例外ではなかった。「過疎だから…」という住民たちの諦めをヤル気に変えること、そして資金繰りである。

「飛鳥山の時代からそうですが、行政の文書主義にも問題があるんです。彼らは現場がどうなっているか知ろうとしない。心の文化にかけるお金は一銭もなく、村おこしといえは橋とか道路のことだと思っっているんですよ」

市町村の発行する資料に書かれている伝統芸能が実際には継承されていなかったり、上演されていなかったりということもしばしばあった。伝統芸能を保存したい。しかし、そのための経費を小さな村の財政に期待することはできない。ここから鈴木さんの行動力のたくましさだった。早速「熊本県立劇場文化振興基金」を設立し、講演会など県内での収入はすべてを振興基金として寄付した。6

年あまりの間に文化振興基金は1億7527万円に達した。内訳は県内外の個人からの寄付が約1867万円、企業からの寄付が2750万円、鈴木さんの活動による寄付が1億2095万円となっている。

舞台は演じ手と観客とでつくる

熊本県立劇場文化振興基金をもとに展開された事業は数限りない。鈴木さんの後押しで継承が安定、または完全復活した民俗芸能は、「三加和町山森神社少年神楽」「阿蘇郡波野村中江岩戸神楽」「菊地松囃子御能」「清和村文楽人形芝居」「泉村五家莊連子古代踊り」「長陽村長野岩戸神楽」等がある。このほかに地域に伝わる唄や踊り、影絵、獅子舞など。それぞれに一年から二年の準備期間がかかるわけだから鈴木さんはあっちこちを飛び回ることになる。

「地元集落で上演するだけでなく、県立劇場も発表の場としてどんどん利用しています。見た人が『県内にこんなに素晴らしい芸能があったのか』と言ってくれること、これが最高に嬉しいですね」と鈴木さん。

また清和村、波野村、長陽村では神楽や文楽を上演できるホールや資料館を建設し、観光客の注目を浴びるようになった。町全体が活気づき、地元に着しようという若者も増えている。

もうひとつ鈴木さんの手法で際立っているのが、演出の妙味とメディアの利用法だ。たとえば平成4年2月には神楽と能を組み合わ



▶球磨村大瀬に伝わる「文政三年棒踊り」。絵巻物をもとに2年かけて江戸時代の棒踊りを再現した。

せ、18時間夜を徹して上演した『熊本の動と静を観る』会。伝統芸能をオールナイトでみせる面白さに加え、その幕間には鈴木さん自身が解説をつける。その様子はNHKの衛星放送で全国に放映され、これまでとつつきにくいと思われていた郷土芸能のイメージを一新した。

「舞台は観客がいてこそ盛り上がる」というのが鈴木さんの理論だ。また映像におさめることで、その芸能を資料として着実に後世に伝えることもできる。テレビをうまく利用する鈴木さんならではの発想だ。



結果はゼロかもしれない といて心構えで

伝統芸能の保存に欠かせないのが人づくりだと、鈴木さんは昭和63年に、県立劇場に「日常塾」を結成した。これは毎週木曜日の昼夜2回、3カ月12回で卒業する20歳以上の社会人講座である。生徒は医師や教師、大工さんと農家の人までさまざま。講義の内容も芸術、宗教、教育、科字からマスコミの見方、文章の書き方まで多岐にわたる。ここでも鈴木さんはまったくのボランティアで教壇に立っている。

「人生には、ふたつの生きがいがあるんです



▶3年間準備し、熊本県22カ所の障害者施設や養護学校生750人と、31の音楽グループ等1500人が出演した「こころのコンサート」(平成5年4月25日)

ね。ひとつは自分に向かって自分はこれでいいのだろうかという向上心。もうひとつが、人のために生きるという奉仕の心。今にも消えていくかもしれない芸術を保存するにはこのボランティアの精神が大切ですよ」

伝統芸能を復活させたり障害者とのイベントを組む場合、肝に命じておかなければならないのは「結果はゼロかもしれない」という心構えだと鈴木さんは言う。ぎりぎりの人数で始めて誰かが身体を壊したら上演ができないうか分からないうまくいくかどうかが分らないといった状況。だが、これを恐れてはなにも始まらない。

「たとえ百人に奉仕しても感謝してもらえないのはたった一人かもしれない。人間そんなに甘くないですからね。でもね、その一人と巡りあうこと、これは大変なロマンですよ」

地域の文化活動を支えるためには奉仕の心が必要。現在県立劇場の重要な助っ人役となつて活躍しているのが「日常塾」の卒業生たちだ。

これからの課題は 「文化と環境」

鈴木さんの文化活動にはそれぞれキーワードがある。たとえば93年に行った「こころのコンサート」は障害者と健常者が音楽を通して結びつく「文化と福祉」を訴え、チャリティーチーム「ヴィ・ラ・ヴィー(Vi・la・Vie)」では「文化と健康」という願いを込めた。そして今年テーマは「文化と環境」だ。

これは文化施設が環境問題に挑戦する日本初の試み「熊本川の川と海」シリーズ。その第一弾として菊池川の本流・支流を含めた全流域に現存する伝統芸能や音楽グループの公演とシンポジウムを開催する。

「ダムができ、これまで身近に思っていた川の水が遠く離れた土地で利用されるようになって、流域住民の『わが川意識』は急速に失われたのです。川を多くの伝統芸能を育てた土壌としてとらえ直すことで、環境保護に結びつけばと考えているのです」

鈴木さんが期待するのは、今回のイベントにアマチュアバンドなど多くの若者が参加することである。若者たちに発表の場を提供することで、地域全体の活性化を図る。これはどんなにすぐれたシンポジウムや発表に交わされる討論会よりも積極的な試みだ。

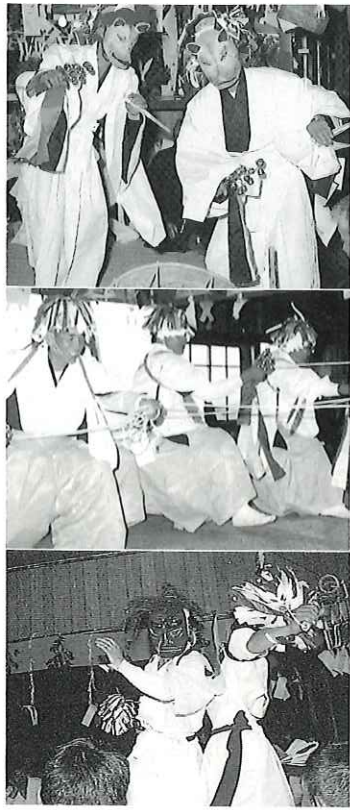
熊本県立劇場、その「行動する美しい劇場」は新しい演じ手を育てつつあるのである。

(浅井四葉)



▲鈴木館長の「若いエネルギーを巻き込んで活力ある町に」の思いから、熊本県立劇場の自主文化事業として誕生したチャリティーチーム「ヴィ・ラ・ヴィー」。約50名の高校生らが高度な技術を身につけ、各所で活躍している。

舞い、楽、「せり歌」が夜を徹して 26地区で継承される「椎葉神楽」(宮崎県椎葉村)



うというもので、一般に「夜神楽」と言われている。

熊本県境にほど近い山また山の奥深い秘境・椎葉村。平家・源氏両者の落人の伝説があり、柳田国男が民俗学に取り組み契機となった村で、ここにはかつて日本中で見られたなつかしい行事や風習が生活の中に根を下ろしている。

伝承芸能や、仕事や行事の時に唄う昔ながらの民謡も数多く残っているが、なかでも圧巻は11月、12月に26地区でそれぞれ行われる「椎葉神楽」。平成3年に国の重要無形文化財に指定された。

神を迎え、笛や太鼓、酒、神楽せり歌、舞い等を通して人と神が、夜を徹して興じ合

今夜さ寒いのに笹山越えて笹の露やら涙やら

今夜せかずばいつまたせこか明日の晩からかこの鳥

神に捧げる最初の三番が終ると、このような「神楽せり歌」が次々と飛び出し、女性も参加して歌詞の掛け合いがはじまる。即興による囃子言葉も多く、演じる人と見る人が一つになって熱気を盛り上げていく。

神を招く押庭の舞い、風難よけの舞い、獅子退治の舞い、悪魔払いの舞い、豊作に感謝する舞い、太刀で厄難を払う

舞いなど、祭事は33番を基調に、楽は太鼓、笛で八調子、六調子をベースに、せり歌、「ごやせき」と呼ばれる神楽囃子で祭りを盛り上げる。

衣装や舞いの様式は各地区ごとに個性的。11月から12月にかけて民家や神社で行われ、酒やご馳走がたっぷり振舞われながら夜通し行われる。

この神楽を受け継いでいくために長男が全員戻っている地区もあり、神楽によって培われる団結は強く、どこの地区を訪ねても「一年で一番楽しい日」で、みなこの日に合わせて帰ってくるという。

なお、3月には「春祭り」「お奉射」(各地区)、7月には祇園祭り(松尾地区)、9月には「ひえつき節」日本一大会、10月には「臼太鼓踊り」(各地区)、11月には2日間にわたり「椎葉平家まつり」(村主催)が行われ、ひえつき節踊り、山法師踊りなども披露されるので一度ぜひ訪ねてみたい。

●問い合わせ/椎葉村教育委員会 ☎0982(67)3111代・2850直

見学者のマナー 撮影時には一定の規制も

海外へ旅行して感じることは、日本人の写真好き。どこへ行っても撮影で忙しい日本人達に出会う。

この傾向は郷土芸能祭りでも同様。最近ではアマチュアカメラマンが特に幅をきかせ、神事などでは一番前にカメラを持った人々が陣取ってしまうので、後ろからは何も見えないこともしばしば。さらには厳粛な神事の最中にも拘わらず、演者の顔にいきなりフラッシュを浴びせたり、舞台となる場所にも平気で踏み込んでいくので、祭りの進行を妨害してしまうケースも。

結局、一般の見学者や良心的な人は、確に見物できず、写真を撮っても祭事の前に立ちふさがるカメラマンの姿ばかりを映すことになってしまう。主催者も遠方から来てくれたからと遠慮して注意をしかねている。石垣島川平地区のように撮影禁止にするとか、撮影には一定の規制を設けるべきである。例えば申請許可した人だけが定められた場所で撮れる、撮影用のシーン・時間を設定する、料金(献金)制等の方法が考え出されてもいい。

木沢の霜月祭りで、地元若者たちが囃子に合わせて「写真ばかり撮っていないで、拍子を取ったり握手をしてくれ」という意味のことを歌っていたのが印象的だった。写真を撮る前に自分の眼でじっくり見ること。演じる人と見る人に分かれるのではなく、両者が一体となって祭りの雰囲気を作るのだということを、我々はもう一度考え直して見る必要がある。(A)



「五城目番楽」(秋田県五城目町)

INFORMATION

各地の民俗芸能

(4月・5月開催分)

☆開催日が変更になることがあります。詳しい日程は担当窓口へお問い合わせください。

■北海道

「松前神楽」 「松前祇園ばやし」(松前町) 随時開催。松前藩主の城内神事として延宝9年以來演じられる多様性豊かな神事。春は桜祭りに。教育委員会 ☎0139(42)3060

■東北地方

「福浦の歌舞伎」青森県佐井村) 4月10日。村の生活に密着した地芝居の原形をとどめている古風な歌舞伎。県重要無形文化財。役場産業課 ☎0175(38)2111

「久渡寺のオシラ講」(弘前市) 5月中旬。津軽各地から農事・家内和合の神であるオシラを持ち寄り、イタコの口寄せて神事を行う。久渡寺 ☎0172(88)1552

「日高火防祭」(水沢市) 4月22日。人形と呼ばれる女の子の太鼓、若い女性の三味線、笛の合奏。午後7時頃ばんぱりを点灯して。商工観光課 ☎0197(24)2111

「鹿踊り」(江刺市) 5月3日。12の鹿踊り団体がある。八鹿踊り、太鼓に合わせて百人が踊る姿は勇壮。教育委員会 ☎0197(35)6555

「天台寺春季例大祭」(岩手県浄法寺町) 5月5日。東北最古の名刹天台寺で白装束での御輿渡し、神楽上演。観光協会 ☎0195(38)2211

「火渡り」(宮城県丸森町) 4

月29日。松沢山光明院で行われる山伏の行法の一つ。国家安泰・諸病退散等を祈願して全国から信者が集まる。 ☎02247(9)2515

「三輪流神楽」(宮城県小野田町) 5月9日。葉菜神社の社人達に伝承されてきたが、現在は氏子有志の手で継承、県重要無形文化財。大宮神社 ☎0229(67)2312

「鉄砲まつり」(宮城県花山村) 5月5日。火縄銃を使用した伝統的な行事。本沢北ノ前地区で。保存会 ☎0228(56)2331

「荒処の沼入り梵天」(秋田県平鹿町) 5月1日。神事のあと厄年の男達が弁天沼にはいつて中央に梵天を立てる。豊作、健康を祈る水祭り。国重要無形文化財。観光協会 ☎0182(24)1111

「五城目番楽」(秋田県五城目町) 5月15日。400年の伝統を持ち、4集落に伝わる。当日は競演会が行われる他、大名行列、「天翔太鼓」なども。商工観光課 ☎0188(52)5222

「山戸能」(山形県温海町) 5月3日。古来より河内神社に奉納されてきた神事。能、地芝居(歌舞伎)が公演される。県無形文化財。保存会 ☎0235(45)2949

「松山能」(山形県松山町) 5月18日。城門の前でかがり火

をたいて能が舞われる。8月には皇大神社境内でも公演する。県無形文化財。商工観光課 ☎0234(62)2611

「黒川能」(山形県柳川村) 5月13日。春日神社の王祇祭に演じられる古い形式を伝える能。その年の祭を統率する陣屋の一室で夜通し演じられる。平安初期に清和天皇がこの地に伝えたといわれ、歴大な演目を厳しい世襲で伝承。役場 ☎0235(57)2111

「除石観音様の獅子舞」(福島県梁川町) 4月頃。大阪城落城でこの地におちのびてきた破賀氏が観音堂を祀り獅子舞を奉納したという由来を持つ。また4月24日には新田愛宕神社で獅子舞。延宝2年に江戸の芝愛宕神社から奉遷したという歴史を持つ。教育委員会 ☎0245(77)1111

「小浜長折三匹獅子」(福島県岩代町) 4月27日。大同年間に信州諏訪から御神体を勧請した時に始められたもので県重要無形文化財。役場観光課 ☎0243(55)2111

「桜枝岐歌舞伎」(福島県桜枝村) 5月12日、8月18日。江戸時代に伝わった近松の名作が古典そのままの素朴な姿で伝承されている。観光協会 ☎0241(75)2432

■関東地方

「獅子舞」 「太々神楽」(群馬

県倉淵村) 4月20日は川浦諏訪神社で獅子舞。関西から信濃を経て伝えられたという厳粛な舞楽。4月3日、11月23日は榛名神社例祭に神楽が奉納される。大正6年より継承。役場観光課 ☎0273(78)3111

「獅子舞」 「太々神楽」(群馬県小野上村) 4月3日。中尾地区で獅子舞、村上地区で太々神楽が演じられる他、八木節大会も開かれ、村をあげて春を祝う行事で賑わう。役場 ☎0279(59)2111

「春の例大祭」(西御荷鉾山大文字の下草刈り) (群馬県万場町) 春の例大祭は黒田、塩沢、相原の各神社で開かれ獅子舞、神楽等が奉納される。4月28日には安産と子宝を祈願する「産泰様祭り」、また4月下旬には西御荷鉾山で直径110mに及ぶ大文字の草刈りが行われる。元禄時代より続く伝統行事。役場総務課 ☎0274(57)2111

「おひながゆ」(群馬県上野村) 4月3日。昔から伝わる子供達の行事で、川原に石積の城を作り、その中をかゆを食べて一日遊ぶ。役場 ☎0274(59)2111

「桜祭り武者行列」(群馬県甘楽町) 4月第2日曜日。城下町小幡の名水百選「雄川堰」のほとりてくり広げられる戦国絵巻、武者行列など。観光課



「播隆祭」で奉納される鶏芸（岐阜県上宝村）



「大鹿歌舞伎」（長野県大鹿村）



「黒川能」（山形県柳川村）

0274(74)3131

「大峰神社・粟澤武尊神社神楽」(群馬県水上町)大峰神社では毎年5月3日。粟澤武尊神社では5月5日に奉納される。観光協会0278(72)2611

「小鹿野歌舞伎」他埼玉県小鹿野町古い民俗芸能を多数伝承しており、県無形文化財の「小鹿野神社春まつり」は4月12、13日。笠鉦、金棒つぎなどの勇壮な舞いが人気。「小鹿野歌舞伎」は4月12日、5月8日に公演される他、県の郷土芸能祭にも。教育委員会0494(75)0603

「柏沢太々神楽」埼玉県両神村)4月4日。続いて4月18日から5月下旬まで、「両神山春まつり」。「仏法僧を聞く会」等。観光協会0494(79)1100

■上越・北陸地方

「巫女節」(新潟県小国町)4月中旬。120余年前から伝わる人形踊り。太郎丸地区の春まつりに公演。教育委員会0258(95)3111

「妹背神楽」(新潟県羽茂町)4月23日。性、すなわち生産を表現する舞踊で一般万倍(豊作)を祈願する神事。古式やぶさめ等も行われる。観光協会0259(88)3111

「あかどまり祭」新潟県赤泊村)4月18日。八幡若宮神社祭

例に御神輿、山車、大獅子等が繰り出す。自然休養村0259(87)3121

「牛の角突き」(新潟県山古志村)5月11日。古代から続く闘牛で、国重要無形文化財。観光協会0258(59)2330

「七つ詣り」(新潟県松代町)5月8日。男児暦年7歳になると七つ詣りと称し松茸神社へ参詣する儀式。役場02559(7)2220

「築山神事」(高岡市)4月23日。動かぬ築山が動く曳山へと発展したと伝えられる高岡御車山の原始形態を残す神事。金工・漆工の粋を集めた「御車山」は5月1日。国指定有形文化財。観光課0766(20)1302

「子供歌舞伎」(砺波市)4月16・17日。250年の歴史をもつ全国でも珍しい子供歌舞伎。商工会議所0766(33)2109

「曳山祭り」(富山県八尾町)5月5日。寛保元年より続き、花山に人形を飾り役者に乗せて町内をひき回す。観光協会0764(54)5138

「やんさんま祭り」(富山県下村)5月4日。やぶさめをヤンサンマと呼び、牛乗式、流鏝式など珍しい古式豊かな祭り。観光協会0766(59)2101

「獅子舞」(富山県利賀村)5月3日、5日。地区ごとに大獅子(百足獅子)、小獅子が出て賑わう。役場0766(68)2111

「御田植神楽」(石川県松任市)大正3年大正天皇の御大礼を記して若宮八幡宮ではじまった田植神事と舞い。0762(75)0513

「したんじょ」(福井市)5月5日。400年の伝統を持ち子供達が侍に扮して「したんじょ」の掛け声でしし狩りをする。浄善寺0776(43)2215

「馬鹿ばやし」(福井市)5月24日。300年続く囃子で秋葉神社に奉納する。保存会0776(36)1678

■中部・東海地方

「千人塚祭典」(長野県飯島町)5月5日。千人童子の墓の供養と水神様を祀って民俗芸能や演芸を披露。観光課0265(86)3111

「大鹿歌舞伎」(長野県大鹿村)5月3日。220年以上伝承され、古い姿を保存している素朴な歌舞伎。教育委員会0265(39)2001

「駒ヶ岳神社例祭」(長野県上松町)5月3日。木曾駒ヶ岳開山式に奉納する太々神楽等が見もの。観光協会0264(52)2001

「塩の道祭り」(長野県白馬村)日本海の塩を運び入れた

塩の道を昔ながらの旅姿で歩くもので、小谷村、大町市でも5月4、5日頃行なう。観光課0261(72)5000

「能郷白山神社猿楽狂言」(岐阜県根尾村)4月13日。白山神社へ奉納する室町期から伝わる能狂言で、国重要無形文化財。教育委員会0581(38)2511

「柿野獅子神楽」(岐阜県美山町)4月第2日曜日。獅子神楽、からくり人形舞などが古式にのっとり行なわれる。役場0581(55)3111

「ででん祭」(岐阜県白鳥町)5月5日。白山三社の御神体を3台のみこしがかつぎ太鼓をででんと鳴らして歩く。観光協会0575(79)3111

「星宮神社大祭」(岐阜県美並村)4月13日。翁の面をかぶった権兵衛が獅子と戯れるユーモアあふれる舞い。観光協会0575(79)3111

「糸切りからくり」(岐阜県八百津町)4月第3日曜日。6面の花山車が勢揃いし、その上で糸切りからくりが披露される。国指定無形文化財。観光協会0574(43)2111

「杵振り踊り」(岐阜県蛭川村)勇壮な笛・太鼓に合わせた派手な衣装と笠をつけた若者達が杵を回して踊る。観光協会0573(45)2211

「神岡まつり」(岐阜県神岡

各地の民俗芸能

(4月・5月開催分)



「牛突き大会」(鳥取県西郷町)



「流しびな」(鳥取県用瀬町)

町)高山祭 古川祭と並ぶ飛騨の三大祭。御輿等で賑わう。役場☎0578(2)2250

「めれた囃子」(岐阜県恵那市)5月2・3日。笛と大小の太鼓による雨乞いのはやし。社会教育課☎0573(25)5230

「子供歌舞伎狂言」(岐阜県垂井町)5月2・4日。文和2年に後光厳天皇に曳山をみせたのがはじまりで稚児歌舞伎が演じられる。美濃一の宮南宮大社ではお田植神事、蛇山神事、少年童子舞い。役場☎0584(22)1151

「播隆祭」(岐阜県上玉村)5月11日。播隆上人塔の前で鶏芸・獅子舞等が奉納される。県重要無形文化財。観光協会☎0578(6)2165

「天宮神社例祭」(小国神社例大祭) (静岡県森町)十二段舞楽が古式豊かに奉納される。天宮神社は4月17・18日。共に国重要無形文化財。観光協会☎05588(5)2111

「長篠合戦のぼり祭り」(愛知県鳳来町)5月第1・2日。曜日。合戦の史実にちなみ行列、火縄銃儀式、手筒花火、神楽等が行われる。観光協会☎05363(2)0022

■ 関西地方

「上げ馬神事」(三重県多度町)5月4・5日。多度神社で

六人の少年騎手が陣笠・袴の姿で乗馬、3mの絶壁を駆け登る。多度神社☎0594(48)2037

「上山神社祭礼」(京都府伊根町)4月25日。優美壮麗な太刀振、神楽舞を公演。菅野区長☎0772(33)0902

「長谷御田まつり」(大阪府能勢町)5月8日。祭主から指定された者が牛と馬子になり豊作を願い農事を行う。教育委員会☎0727(34)0011

「婆々焼祭」(兵庫県日高町)4月14日。稚成親王の但馬配流の時、追いかけてきた妃を老婆が意地悪して亡くし、老婆を火あぶりにしたという故事による祭り。教育委員会☎0796(42)1111

「お走り祭り」(兵庫県養父町)4月15・16日。150キロのみこしを10人の若者がかついで大星川を渡り40kmを練り歩く勇壮な奇祭。役場☎0796(64)0281

「金毘羅祭」(和歌山県白浜町)4月10日。子供角力大会、神楽、もち投げ等で賑わう。役場☎0739(43)5555

「熊野本宮大社例大祭」(和歌山県本宮町)4月15日。熊野古道をお渡り行列する「熊野詣」、全国の神社関係者が集まる「熊野本宮大社例大祭」、稚児達が父親の肩車で湯峰から熊野古道、神社まで歩く「湯登神事」等がある。観光協会

☎0735(42)0735

■ 中国地方

「宇倍神社例大祭」(鳥取県国府町)4月21日。400貫のみこし、本物の鎧を来た武者行列、大名行列があり、本殿では無形文化財のキリン獅子舞が奉納される。観光協会☎0857(22)0111

「流しびな」(鳥取県用瀬町)4月20日。ワラで作った台に紙や布で作ったひな様、それに季節の果物、野菜などを乗せて千代川へ流す古い行事。県無形文化財。観光協会☎0858(27)3108

「城山神社祭礼」(鳥取県鹿野町)4月14・15日。志加奴神社の例祭と合わせて山車4台に獅子舞が奉納される。県無形文化財。観光協会☎0857(84)2011

「若桜神社御幸祭」(鳥取県若桜町)5月3日。みこし、櫛、武者行列等で終日賑わう。圧巻は深夜、松明に照らされて帰還するみこし行列。観光協会☎0858(22)1111

「蓮華会舞」(鳥根県西郷町)4月21日。宮廷舞楽の流れをくむ古典芸能。舞楽面を使い表祭り7曲、裏祭り2曲が舞われる。国重要無形文化財。西郷町では5月2日に、隠岐の代表的民謡「しげさ節」大会、4月29日に「牛突き大会」も開催される。観光協会☎0

8512(2)0787

「25菩薩練供養」(岡山県久米南町)4月第2日曜日。浄土宗開祖法然上人の父母を供養する日本三大練供養の一つ。誕生寺☎0867(28)2102

「山中一揆義民祭」(岡山県湯原町)5月2・3日。太鼓等を盛大に打ち義民の丘で護摩供養を行う。役場☎0867(62)2011

「お田植祭り」他(岡山県八束村)5月3日は「神田神社祭」で祭りばやし、行列、みこしが出て近郷最大の賑わいに。また5月5日は長田神社氏子達が苗代作りから田植を演ずる神事が行われる。教育委員会☎0867(66)2337

「深入山山焼き祭」(広島県戸河内町)4月中旬。日本三景の宮島から霊火「きえずの火」を運び、深入山麓1000ヘクタールを焼く勇壮な祭り。観光室☎0826(28)2111

「桑田はやし田」(広島県美土里町)5月20・6月30日。「生田はやし」「本郷はやし田」と共に旧藩時代より伝承されているはやしの実演会。教育委員会☎0826(54)0311

「神明宮の的祭り」(山口県川上村)4月29日。その昔、神明様に祈願して大鰻の亡霊を弓矢で退治したことから、36間先の的に矢が当たるまで射ち続ける神事。公民館☎0838(54)2214(以下39頁へ)



囲炉裏を囲んで昔話に聞き入る観光客たち
撮影・浦田穂一



柳田国男が調査のために泊まった旅籠。



遠野駅の駅舎二階がホテル「フォルクローロ遠野」

JRもひと役買って 民話のふるさと・遠野がグンと身近かになった。

柳田国男の「遠野物語」で知られる東北の小さな山里・遠野。語り継がれたいくつもの民話や伝統芸能、土着の民間信仰が今でも息づくこの土地に、最近JRの経営する「フォルクローロ遠野」というホテルがオープンした。そのホテルはJR遠野駅の駅舎の二階、ここを拠点にして、遠野への旅をもっと気軽に、フットワークのいいものにして貰おうというのが、町とJRの狙いようだ。地域の活性化にJRがひと役買った好例として注目されているそのホテルに一泊し、小正月の伝統行事に湧く冬の遠野を歩いてみた。

列車とホテルとイベントを バックにして

東北新幹線花巻駅から、釜石線の小さなディーゼルカーに乗り換えると、車内の雰囲気は一変してゆつたりとした北国のカラーに溢れた。暖かそうな頭巾を頭からかぶったお年寄り。いい匂いのお団子を頬ばっている親子連れ。蒸気で曇った車窓の向こうには、一面の雪景色が広がっている。

遠野は釜石へ向かって走るこの路線の中間あたりに拓けた小さな町だ。

JRはこの遠野への旅を、鉄道とホテル「フォルクローロ遠野」の宿泊をセットにし、「遠野の四季」というパックにして売り出した。冬の遠野は小正月の伝統行事も多く、都会に暮らす

者にとって、それはあの「遠野物語」の暮らしをかい間見るような、魅力あふれる世界。旅の企画としても大いに興味深く、面白そうだ。

遠野駅の改札を出ると、JRの経営するそのホテルは、すぐ隣りだった。レンガ造りの駅舎の一階一部がホテルのフロントとラウンジ。二階が客室となっている。このホテルはイギリスなどによくあるB&B（ベッド&ブレックファースト）タイプで、簡単な朝食のみがついたスタイル。手頃な料金が魅力だ。駅のホテルという安心感や、利便性が受けて、開業以来、人気を呼んでいるという。

客室の窓から広がる駅前のかな風景にホッとしながら、旅の荷を解く旅行者も多いことだろう。

「遠野物語」の舞台を歩く

遠野の小正月はたくさん行事で埋めつくされている。凶作の続く寒冷地に暮らす人々にとって、新しい年への願いを込められたそれらの行事が、どれ程大切なものであったか、容易に察することができ。山の神さまに、田の神さまに、そしておしらさまに、人々は一家の幸せと豊作の祈願をした。

遠野市ではこの小正月の行事の一部を一般観光客用に公開し、「遠野冬まつり」「遠野囲炉裏夜話」と銘打って実施。ふるさと村で行われた「冬まつ

り」の中の「おしらさま祭り」では、紅白の団子で作ったみずき飾りの展示や、餅つき、凧づくり、しし踊りや神楽などの郷土芸能、昔ばなし、おしらさま飾りなどのイベントが催された。

「おしらさま祭り」のおしらさまとは、柳田国男「遠野物語」でも語られているように、その昔、農家の娘が飼馬に恋をしたことに始まる伝説の神さまだ。飼馬に恋をした娘の父親が、怒って馬を殺したところ、馬と一緒に娘も天に昇り、おしらさまになった、という伝えられている。

おしらさまは農業の神さま、馬の神さま、そして蚕の神さまとして、各家々に祀られ、1月16日の小正月には御神体の桑の木に新しい着物を着せて、新たな祈願をするのだという。

遠野市土淵にある伝承園では、この地方特有の南部曲り家の公開とともに、おしら堂を設けて、千体のおしらさまを祀っている。お堂の中にズラリと並んだ千体のおしらさまの姿は、息をのむほどの迫力で圧巻だ。

遠野市ではこの他にも昔話を聞かせる「じっくり昔っこ」や「ほのほの昔語り」を実施している。囲炉裏を囲んで聞く、語り手たちの昔話は素朴でしみじみとしていて、思わず物語の世界へと引き込まれていく。

翌日の昼下がり、雪におおわれた駅前の小さな商店街を、のんびりと歩い



上/正月の門松に使った松の葉を稲に見たてて雪の上にあさず「お田植え」は遠野を代表する小正月の行事の一つ。
 中/子供たちが先頭に立ち、その後をシシが続く遠野郷のシシ踊り。
 下/民家の土間にしめ縄を張って演じられる伝統の神楽。小正月と9月に行われる。(撮影・浦田穂一)



てみた。

道はすぐに終ってしまい、正面に立派な市民センターと図書館、博物館が並んでいる。そして市民センターの向かいにあるのが「とおの昔話村」だ。昔話を聞かせる物語蔵の他、柳田国男の隠居所や彼が調査に来るたびに泊まっていた旅籠が、遠野町内から移築されている。柳田国男や折口信夫が泊まっていたという部屋は、まさに民俗学調査の拠点となった部屋だった。この遠野の町でアマチュアカメラマンの浦田穂一さんを紹介された。浦田さんは遠野の博物館に常駐しながら、市や町に依頼されてイベントや印刷物

の写真を撮っている。その浦田さんに彼の写真集「遠野物語」を見せていただいた。

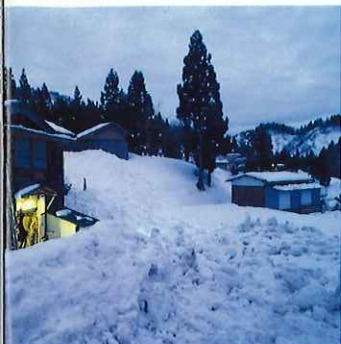
馬に寄り添う老女。そして死んでいった同じ馬を埋葬する老女。飼馬を小さな流れの中で洗う少女。大きな茅ぶき屋根と軒下の兔たち。稲作に恵まれなかった冷涼な土地で、人々は馬を飼ひ細々と生計をたてた。その暮らしの温かさが、どの写真からも伝わってくる。



小正月には欠かせないミズキ飾り

柳田国男の「遠野物語」の世界は、いまでは展示物や催事によってしか見る機会はなくなってきたが、ここに暮らす人々の誰もがあの物語をこよなく愛している。遠野市では、この山里が育んできた文化や暮らしの知恵や土着の信仰を大切に守り育て、次代に継承していくためのさまざまなプランを策定し、事業化を推進中である。

(金山淑子)



凍てる夜を熱くする 子供たちの歌声 鳥追いまつり

●十日町市赤倉地区



雪国・越後の小正月行事

あの鳥、どっから追ってきた
この鳥、どっから追ってきた
信濃の国から追ってきた
……
おらの村の芋掘り爺さが
芋も掘らず刈野も刈らず
赤猫抱いて寝て ホンヤラホンヤラ

▼世話人の庭野さん



ホーイ ホーイ
2 mほど積み上げた雪の舞台に立ち、子供たちが元気に鳥追いの歌を唄う。雪国の子供達の小正月行事の一つで、地域によっては拍子木を叩いて歌いながら集落を歩くというが、いまは殆ど姿を消した。雪国の子供行事としては「雪まつり」の観光客用に、越後では「ホンヤラドー」というかまくらを作る行事が残っている。
赤倉地区は十日町市内から東方へ車で約20分（8㎞）ほど入った集落。十日町市、ちぢみ織りの発祥の地といわれ、古い歴史を持つ地域だが、豪雪地の中の豪雪地。街へ下りる人が増えて現在は20戸、100人ほどになった。しかし14日の夜の「鳥追いまつり」には元気な子供達が10人ほど集まって



▲歳の神をまつる祭壇

きた。世話人の庭野与一さんが早くに
来て、舞台の下で薪を燃やしなが
ら子供達の歌の音頭を取る。ライトで照
らされ、煙でむせて、はじめは小さな
声で歌っていた子供達だが、どんどん
大きな声となり、歌声は裏手の巨木を
越え、村中にこだましていった。
「私らの子供の頃は70戸以上あったの
で、三つの地区の子供が競い合い、喧
嘩でもはじまりそうな勢いだっただけ
当は全部子供達が用意するものだけ

ど、いまは大人が手伝い、みんなが来
て、今年一年の豊作と子供のすこやか
な成長を願って歌うんです」
と庭野さん。ワラ細工等の伝統民芸
品を作るグループのリーダーで、市内
の工芸館で10数種のも物が展示販売さ
れているという。
赤倉地区には500年の伝統を持つ
「赤倉神楽」(9月公演)があり、青
年神楽団が海外公演に出かけたこと
もある。また「雪まつり」(2月)には

赤倉地区の造形物が毎回優秀作品に選
ばれるなど、文化や伝統を守り育てる
風土がしっかりと根をおろしている。
15日は「鳥追いまつり」会場の隣り
でドンド焼きが行われ、市内から大勢
の見学者がやってきた。
2mを越える雪も、幹線はしっかりと
除雪され、通勤・通学に支障はなくな
った。雪囲いした家々と人情あふれる
人々―雪国の暖かさをかい間見
た小さな旅だった。

ユーモアたっぷりの「雪遊び」奇祭

ムコ投げ 歳の神

松之山町湯本地区



全国でも有数の豪雪地として
知られる松之山町の湯本では、
正月行事として、前年結婚した
男性を雪の中へ投げ出す「ムコ
投げ」と、どんど焼きの炭を雪
にませて顔にぬりたくる「歳の
神」の奇祭が続けられ、観光客
にも人気を呼んでいる。
婿投げは、今から300年ほ
ど前より隣りの天水越地区に伝
わる小正月行事で、他村へ嫁い
だ娘が婿を連れて帰ったところ
を、やつかみ半分で村の若い連
が雪の中へ放り出し、そのあと

和気あ
いあい
酒を酌
交わし
たとい
うもの



だが、対象となる若者が減り、湯本
区が引き継いで行うようになった。
雪の洗礼を受けるのは前の年に結婚
した婿たち。今年は鈴木一広さん(27
歳・板前)と村山信吾さん(37歳・旅
館経営)の二人。午後2時半頃、男の
人たちにかつがれた両氏が湯泉街を通
りぬけ裏山の薬師堂へやってきた。薬



▲松飾りの上に子供の書初めとダルマを飾った歳の神は、20～30分で炎に包まれた。
 ▶神主とムコ投げされた2組の若夫婦が神事に立ち会う。
 ▼たちまち全員が墨で真黒に。お巡りさんも、取材にきたテレビ・レポーターも。



師堂で一同そろってお神酒をいただいたあと、婿は眼の前の5mほどある崖の雪の中へ投げ出され、転がり落ちたところで嫁さんが待っていて受け止める。「私も15年ほど前にこうして投

げられました。この洗礼を受けると夫婦円満、別れた人は一人もいせんよ」と投げ役の男の人達にこやかに語る。かつては豪雪のため冬期は閉鎖した松之山温泉もいまは除雪が完備、スキー客の利用も多くなり、活気を呈している。後継者も育ち、松之山町（人口3200人）の中では最も若者が多い地区になっている。都会から嫁いでくる女性達も多いという。

「ムコ投げ」のあとは、近くの広場に設営された歳の神会場へ。今から600年程前から伝わる行事で、正月に飾った門松やしめ飾り、書き初めなどで高い塔が作られている。

広場に集まってきた人は300人以上。温泉組合長の挨拶のあと神主が古式にのっとり火打ち道具で火を起し、婿投げされた若夫婦が歳の神に点火する。火が燃え出す頃、福袋や宝みかんが訪れた人々にふるまわれた。

やがて火が燃え終る頃になると、灰を手にとり雪に混ぜて墨をつくり、「おめでとー」と言いながら誰かまわらず墨をぬりたくり出した。墨をぬられると無病息災、家業繁昌だそうで、またたく間にどの人の顔も真黒になってしまった。そのあとは早速温泉の湯へ。ユーモラスな雪国の行事に参加して人々がたくましく元気に雪の暮らしを楽しんでる姿に改めて感動した。

(写真/小林恵 文/浅井登美子)

INFORMATION

各地の民俗芸能

(33頁からの続き)



「大風合戦」(愛媛県五十崎町)



「けまり」(香川県琴平町)

■四国地方

「窪野八つ鹿踊り」(愛媛県城川町) 4月17日。三滝城守護神蔵王大権現へ奉納する鹿踊り。国無形文化財。観光協会 ☎0894(82)1111

「伊予神楽」(愛媛県広見町) 伊勢神楽に属するもので、古式豊かに夜を徹して舞う。国重要文化財。伊予神楽かななぎ会 ☎0895(45)0625
「石清水八幡神社例大祭」(愛媛県小松町) 5月10日。みこし3体、獅子2頭が出て町内を練り歩き神社へ奉納する。神社 ☎0898(55)3237

「いかぎき大風合戦」(愛媛県五十崎町) 5月5日。川をはさんで両河原で畳2枚大の凧が数百個あげられ、ががりという刃物で凧糸を切り合う行事。けんか凧の揚げ方教室も開催。観光協会 ☎0893(44)2121

「けまり」(金毘羅歌舞伎) (香川県琴平町) 5月5日。金毘羅宮前庭で平安時代の装束をまとった神官たちが「アリアーアリー」とまりけりをする。歌舞伎は日本最古の芝居小屋「旧金毘羅大芝居」で5月中旬開催。社務所 ☎0877(75)2121

■九州・沖縄地方

「山田の感応楽」(豊前市) 4月29・5月1日。五穀豊穣雨乞、天下泰平を祈願する神事。重要無形文化財。保存会 ☎0979(82)2666

「浮羽おくんち」(福岡県浮羽町) 4月11日。素朴で優雅な子供衆が奉納され、青年の振毛槍や神輿の渡御がある。保存会 ☎0943(77)2548

「神幸祭」(福岡県犀川町) 5月9・11日。高さ15m、重さ3・5tの山笠をハッピ姿の若者たちが動かす勇壮な行事。役場 ☎09304(2)0001

「赤幡神楽」(福岡県築城町) 5月3日。豊前岩戸神楽で明治7年、民間人が神楽を奉納する機会となったもの。5月6日には湯立て神事の「寒田神楽」も行われる。役場産業課 ☎09305(2)0111

「春季大祭」(熊本県玉名市) 伊倉南八幡宮と北八幡宮で、それぞれ神事、練り嫁行列他開催される。神社 ☎0987(2)2924、3537
「牛深ハイヤ祭り」(熊本県牛深市) 4月第3土・日曜日。民俗踊りの原点といわれる500名のハイヤ道中踊りで街中がエネルギーに湧く。商工観光課 ☎09697(3)2111

「御田植祭」(大分県日田市) 4月15日。大原八幡宮広場で牛の舞などを披露。社務所 ☎0973(23)8951

「えびす里神楽」(大分県真玉町) 4月3日。町内だけでなく各地へ出かけ神楽を神社へ奉納する。保存会 ☎0978(54)2523

「萬原岩戸神楽」(大分県蒲江町) 4月5・6日。華麗で闊達な12番からなる岩戸神楽。保存会 ☎0972(44)0215
「荻野社・ゆたて」(大分県荻町) 4月26日。800年の伝統を持つ神事。竹笹を釜湯につけて参拝者にふりかけ一年の無病息災等を祈願する。役場 ☎0974(68)2211

「所小野神楽」(大分県山国町) 耶馬溪谷ではじめての「神楽社」となって各地の神社に奉納されている。役場 ☎0979(62)3111
「与論十五夜踊り」(与論島) 琴平神社境内で年3回(旧暦3、8、10月)に奉納される300年の歴史を持つ祭り。12の狂言から成る大和踊りと琉球覆面をつけて舞う里主子踊りがある。国重要無形文化財。☎0997(97)5151

「宝満神社お田植祭」(南種子町) 4月上旬。豊作を祈願して舞い奉納する。観光課 ☎09972(6)1111
「アカタマ・クロタマ」(竹富島、小浜島等の八重山諸島) 旧6月吉日。アカタマ・クロタマと称する来訪神が全身を葛で巻いた異装でお慰の中からお出現、豊作を祈願する秘祭。

お知らせ

過疎地域活性化ビデオ ● 第3弾
『出会い きらめく自然』

VHSカラー30分完成

山梨県早川町、石川県能登島町、岩手県岩泉町の豊かな地域資源と、アイデアを活用した観光地づくりを紹介いたします。

『たおやかな矜持』が広がれ ふれあいの輪』に続く第3弾です。

ビデオの他に16mmフィルムも制作しましたのでご利用ください。

編集後記

▼取材時期や誌面の都合で、各地の郷土芸能のほんの一部しか紹介できなかったがこの特集は次回以降もぜひ行っていきたい。郷土芸能を継承することの努力が地域活性化のエネルギーなんだと実感する一方で、自分を含めて観客とは何なのかを問う機会ともなった。(浅井)

De POLA [でぽら]
No.10('96春夏号)

発行日/平成8年3月15日
発行所/全国過疎地域活性連盟
〒105 東京都港区虎ノ門1-1-24
オカモトヤビル 8階 ☎03(3580)3070(代)

編集協力・印刷/櫛ぎようせい
■協力/(財)地域活性化センター
(財)ふるさと情報センター



大物を釣り上げるためのルアーは、
見た目も楽しい本物そっくり。
買ったときから夢をくれる宝くじと
なんか似てるね。

キラリ、 アツビゴコロ。

宝くじの収益金は、
公共事業に役立っています。



財団法人 日本宝くじ協会

●本誌は財団法人日本宝くじ協会の助成を受けて作成されたものです。